
ライバルは中学生！？

奈津美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライバルは中学生！？

【ISBN】

N8632A

【作者名】

奈津美

【あらすじ】

この話はコナンと哀が元の姿に戻った後の話です。ある日、中学生の女の子に新一がファーストキスを！？蘭は許せなくて・・・。

#1 「いきなりのキス」（前書き）

この話は、新一×蘭です。

灰原哀は宮野志保として出でます。

#1 「いきなりのキス」

私達はずっと仲良くなっているよ。

だって、ずっと一緒にいたじゃない。」

「新一…早くしなきや遅刻しちゃうよ…」

「うっせーなあ、今行くからよ。」

「まったく…。」

私の名前は毛利蘭 新一の幼なじみ

新一は、東の高校生探偵工藤新一で有名人。

だから、新一の郵便受けはいつもいつも

「出た、ラブレター。」

ガチャ

「おい、蘭。見てんじゃねーよー。」

「新一…!…だって気になるじゃない。」

「へいへい。」

「…………あのぉ。」

後ろから声がした

「ほんとうはー私、佐々岡結奈って言いますーー。」

「えーとお・・・。俺になんか用かな?」

その子の制服は帝丹中学校の制服だった。

「しゃがんでください。」

「いいよ。」

新一がしゃがんだ時

チユツ

(えつ。。。

その子はこきなり新一にキスをした。

#1 「いきなりのキス」（後書き）

ちょっと展開が急な気がしますが。。。
感想才ネガイします m(。 。) m
初めての連載です。
文章も未熟ですがよろしくお願ひします。

#2 「極の悪」（詮議や）

#1で、高校名を間違えたことにびっくりする

すいませんでしたー。

#2 「恋の想い」

私の目の前で、その子は新一とキスをしたの。

新一は目を丸くして驚いた

「新一さん、私を覚えてないんですかあ？」

「えつ・・・。」

（なにが覚えてないんですかあ？よーー小さこ「あ」とかつかわや
つて！－）

「ああ！佐々岡さんの！－」

「新一、知ってるの？？」

「()の前の事件でちょっとな。」

「ふ～ん。」

「新一さんと話せなくって···結奈ね、後悔したんだよー。」

（あわわわ、自分を名前で言ひタイプ！－）

私はその子が気にいらなかつた。

新一のファーストキスを奪つとして！

許さないんだからーー！

「結奈、新一ちゃん、田惚れしちゃいました。」

「はあーーー！」

なにがー田ぼれよつーー。

「新一、早く行かなきゃ遅刻しちゃうよー。」

「ああ。」

私達は急いで学校に向かったの

「・・・あのおせわさん、結奈ことって邪魔者かも。」

（帝丹高校）

「おはよう園子。」

「蘭、なんか怒つてなーい？」

怒つてるにあまつてるじゃないーー！

園子に教えたほつがいいのかなあ。

「実はね、園子・・・。」

説明中・・・。

「で、その結奈とかこの子が新一君のファーストキスを奪ったのね。」

「

「うん。」

「その子は蘭と新一君が夫婦ってこと知らないの？」

「うん……って夫婦じゃないよおー。」

あの子……可愛かったなあ。

田がぱつちりしてて、パー・マがかつた茶色の髪の毛

「ちよっと行つてくるね。」

「どう行くの？ 園子？..？」

「ちよっとね。」

園子はどうか行つちやつた。

「はあ～。」

私、どうしたらいいんだろ。。

#2 「薙の思」（後書き）

佐々岡結奈は「ややおかゆーな」と読みます。
オリジナルキャラです。
中一の14歳って設定です。

#3 「決闘!-?」（前書き）

えーと、あとどれくらい続くか分かりませんが・・・。
新一と蘭の応援オネガイします。

#3 「決闘!-?」

（廊下）

「ちよつと、新一君ー。」

園子は新一に話しかけた。

「なんだよ、園子かあ。」

「ちよつと話があるんだけど。」

「ええ～あとでな。」

新一君つたら、私の話を聞きなさいよー。

よし、この手を使おうー。

「新一君、耳貸してー。」

「ああ、分かつたよ。」

私は新一君の耳元で小さく囁いた

（蘭のー）となんだけど・・・。）

「分かった、屋上で聞いてやるよ。」

新一君はいつ大抵OKなのよねえ

この鈴木園子をなめちゃいけないのよ。

オー ホツ ホツ ホツ オー ホツ ホツ ホツ

(つたく、園子は大抵ああ言つからなあ・・・。)

俺はしようがなく園子についてつた

～屋上～

空は綺麗な水色だった。

俺、なんで園子に弱いんだよお・・・。

「なんだよ園子。」

「新一君、今日ファーストキスだつたんだって?」

「うう・・・。」

蘭のやつ・・・話しあがつたな!!

いや、園子がムリヤリ聞き出したつて可能性もあるやつ・・・。

「ああ、ナビムリヤリだぜ! だつて俺!」

「俺は蘭とキスしたかつたんだつ! でしょ?」

「おー園子! ! !

「蘭、元気がないのよねえ・・・。」

蘭の目の前であなな」とあつたからなあ・・・。

「けど、ある意味チャンスよー。」

「はあ？ チャンス？？」

そうよ、チャンスよー！

結奈ちゃんを使わせてもらいうわよー！

名づけて「新一＆蘭！恋の難関を乗り越えよ大作戦！ー！」

「頑張りましようね、新一君。」

「は・・・はあ。」

俺、こいつを信じていいのだろうか・・・。

（放課後）

「新一、帰ろっ。」

「ああ。」

「ヒューーヒューー 今日も一人で下校ですかあ。」

「うつせーよ。」

新一 せんだい こうじと おののかな・・・。

あのキスの」と・・・。

「ねえ、新一・・・。聞いてもいいかな?」

「あ、ここナビ。」

「結奈ちゃんのこと・・・なんだけど。」

「えつー。」

(えつこひび)

「あのわら蘭、俺があ結奈ちゃんのことなんとも思ってないから。」

「やっかあ。」

「えつ?」

「よかつた。」

蘭が笑つた時俺は安心した。

「えつひび。」

「えつこひび。」

「」「さんひび 新一さん、蘭さん。」

「結奈ちゃん・・・。」

「どうしたくな時にくるんだよーー！」

「マイミング悪すぎだらつー

「蘭ちゃん、あなたに決闘を申し込みます！」

「はあ？？」

「結奈にとつてあなたはライバルなのーー！」

あーあー結奈ちゃんは知らないんだよなあ

蘭が空手の達人つてことを・・・。

「私と決闘・・いいけど?」

「蘭ちゃん、結奈これでも空手やつてるの。」

「えつーーー。」

「都大会優勝しましたからあ。」

つまり・・・高校生都大会チャンピオンと中学生都大会チャンピオンの決闘？

うわあ・・・俺でも勝てないかも・・・。

「私、負けないわよ。」

蘭もやる気だなあ。

「じゃあね、新一さん！」

「これから怖いことにならうだ……。」

「新一、私絶対勝つてみせるからねっ！」

私が新一を守つてあげなきゃ！

「が・・頑張れよ蘭。」

空には綺麗な夕焼け

下にはあつの行列

横には自信に満ち溢れた蘭

後ろには俺に手を振る結奈ちゃん

俺の心は複雑だ……。

「やつひつ、新一明日は早起きしてねっ。」

「なんだよ。」

「空手の練習も一新一のためなんだからね。」

「せつやビーム。」

蘭は練習しなくたって勝てるだろ・・・。

「じゅーね、新一。」

「じゅあな、蘭。」

俺は今日の夜、田覚ましを600アシナゲした。

ゆっくら寝よいつと思つたの・・・。

「一〇二時に限つて眠れないんだよなあ・・・。

園子はなんかたぐらんでるし・・・。

結奈ちゃんは空手の達人らしく・・・。

俺はどうしたらいいんだよつ・・・。

「蘭の家へ

「新一、結奈ちゃんのことなんにも思つてないんだよね。」

「新一・・・起きてるかなあ。」

「蘭、まだ起きてたのか?」

「お父さん。」

「はあ～、あれこな星空だなあ。」

井ので窓に散つざめられた井口みたい。

「本郷だあ・・。」

「ほんまに本郷ホールをもつ一杯ー。」

「お父さんー。お酒はもつだめー。」

#3 「決闘…？」（後書き）

結奈も空手をやつてるとこいつ設定はよかつたのかな？

結奈はふりつけるのに空手・・・？（笑）

次回！あの色黒探偵が・・・。

4 「登校前のお客様」（前書き）

今回はあの色黒探偵と彼女？が出来ますよ。

#4 「結校前のお姉様」

朝日が出た頃、田嶽まし時計の音がなり響く

パンパンパンパンパンパンパンパンパン

「ねえ…・・・。」

「 カリッ・・・・。」

” ピンポン”

“ はーーー蘭のやつ! こんな早くて来たのか! ?

” ピンポンピンポンピンポンピンポン”

だーーー! ハセーーなああー!

「 うわーとせりへれよー。」

俺は急いで顔洗つてはみが毛糸制服に着替えた

” ピンポンハリンボンペンボンペンボン”

しつこいわーー。

「 せこせこせこせこ。」

ガチャ

「えつ・・・・。」

「あら、工藤君起きてたのね。」

「面野ー。」

訪問者は面野志保だつた。

「あなたこお密さんか來てるんだけど?」

「密? ?」

「こつとくけど、彼女じやないわよ。」

「はいはい。」

「こつの話しおつて相変わらすシニシニしてゐよなあ・・・。」

「・・・かわいくないやつ。」

「あら工藤君なにか言つたかしら?」

「げつ・・・」こつの耳は地獄耳かよ。

「なんでもありません。」

俺達はとうあえず博士の家に行つた。

「博士一、誰だよ密ひてー。」

「く・ビ・ヒー。」

「ん・・・」の声は・・・。

そう、この話し方の声はあこつしかいない・・・。

「服部・・・。」

服部平次・・・と

「1」めんなあ、工藤君。平次がビーしても遊びに行へつて言つかり。

」

遠山和葉だ。

「いや、いいけど学校は?」

「ああ、今日は休みなんや。」

「休み?？」

「あのなあ、今日は学校の創立記念日なんよ。」

「そつか、じやあ俺ん家来いよ。」

「いいのや?」

「和葉ひやさんはね。」

「おこ、工藤！なんで俺はアカンのやーー！」

「平次がいけないんよお、工藤君に連絡なしこきたんやからあ。」

「たぐ・・・来るなり来ひて言えよな・・。」

「ハハ和葉は黙つときー。俺は工藤と話しつらやーー。」

「ハハことはなんやーー。」のアホーー。」

「分かつた、服部も来いよ。」

「じやあ、工藤君お願ひね。」

「まこはこ、じやあな。」

「工藤君、おれこへいらこしたひだり。」

「どうもあつがとうございました。これでこいか？」

「フサヒランドの限定品・・。」

「そんな金ねーよー。」

あたりはもつすつかり畳のくなつっていた。

（新一の家）

「そーいえば服部。」

「ん?」

「朝食べてきたのか?..?」

「いや、食べてへんけど。」

「はあ? 平次食べてへんの?..?」

「工藤の家で食べりゃいいと思つたんやけど。。」

「アホ……ビンだけ迷惑かけたら氣一済むんやー。」

またケンカかよ。。。

「そやつたら朝食べた?とかいうとけボケHーー!」

服部のこいつとめちやくぢやじやねーか。。。

「ちょっと待つわ。」

俺はしようがないから朝食を作つてやつた。

「服部、田玉焼きには醤油でいいか?」

「は? 田玉焼きには塩やん?」

「なにこいつのやーソースに決まつてゐるやつ?」

またケンカかよー。つたく付を合ひてらさんねーぜ

「せりゆつ。」

俺はテーブルに塩とソースと醤油を置いた

「つたく・・好きなのかけりよ。」

「サンキyo。」

” ペンポンペンポン ”

「あつ、蘭だ。」

「つそつー。蘭ちやん?会いたかったんよおー。」

和葉ちやんは急いでドアを開けた

「えつ、和葉ちやんー。」

「蘭ちやーんー。」

「なあ、上藤。」

「なんだよ。」

「あのねえりやん怖いなあー。」

「あー、面野の」とか?。」

「なんかシンシンしてかわいくないやつひめ。」

「アハハハハ・・・。」

といつあえず俺は学校に行く準備をして家を出た。

#4 「登校前のお客様」（後書き）

えーと、私は埼玉県人なので・・・。
大阪弁がさっぱりでして、勘で書きました^ ^;
すいませんm(ーー")m
次回は結奈と蘭がショッピング！？

#5 「今日なぜで豊田は國ト一？」（前書き）

題名の意味は本文読めばだいたい分かるかと。
長い題名ですいません。

#5 「今日は朝で四〇は四〇か一・?」

辺りはすっかり明るい

俺はすつじぐく眠い

「ふあ～あ

「やだ新一すつじこあぐびね。」

しうがないだろ！

6・00に起きた上に服部たちが来てるんだから。

「今日学校早く終るよね。」

「へつ？セうなの？？」

「なに言つてんの？今日は高校説明会で学校使つかう・00には
帰れるよ。」

「へえ～。」

昨日の先生の話聞いてなかつたもんな～

「どいか・・・行かない？」

「えつ？？」

蘭じいじか・・?

「それって、データーとか?」

「ばかーなにこいつらのー。」

けど家に服部達いるしなあ・・。

服部がなにしでかすか分かんないしなあ・・。

「おせよいわれこまわー。」

「の壇・・・・。」

「結奈ちやん・・・。」

「今日は蘭ちゃんにお話があつてえ、来ましたあ。」

「えつ?私?」

珍しいことわあゐるだなあ・・・。

いきなり握手のとくみあことかしないよなあ・・・?

俺はさうひと不安だつた。

「ショッピングに行きましたか?」

「えつ??.」

「決闘のことを忘れて行きましょうつよ。」

「よつと待て！」

蘭と結奈ちゃんがショッピングに行つたら俺一人じゃん！

「「めんね、結奈ちゃん。今日はひよつと……。」

「今日へやつかあ、結奈明日つて言つてなかつたんだあ。」

明日行くのか……ならこいナビ

「明日ならこいわよ。」

「じやあ、明日の10月に新一さんの家の前で待ち合せー。」

なんで俺の家の前なんだよ……。

「じゃあ、わよつなりあー。」

結奈ちゃんは走つて学校に向かつた。

「蘭、こーのが？」

「「へん……まあ結奈ちゃんのこと知りたいしね。」

もの凄く不安なんですね……。

「学校へ

「じゃあ、新一。私 手の練習あるから。」

「ああ、分かったよ。」

学校は静かだつた。

朝練は7：40からだからなあ。。。

まだ7：20だし。

蘭のところでも行くかあ。。。

俺は体育館に行こうとした。

「新一君ー。どうしたのこんな朝早く。」

「なんだ園子か。」

「なんだじゃないわよ、それより蘭は？」

「練習中。」

「ああ、決闘のお。」

「なんで知つてんだ??。」

「昨日蘭から電話があつたのよ。」

「へえ~。」

蘭のやつ園子に話したのか。

「でも、明日どうか行かない？？」

「くつ？」

「このじろと話したいからつ。」

明日は蘭もいないし・・・。

家には服部と和葉ちゃんがいるし・・・。

「んー・・・。」

「大丈夫、蘭から許可取るからさつ。」

「分かつたよ・・・。」

ムリヤリだつたよーな・・・。

まついつか。

「そろそろ朝練ね、新一君サッカー部の朝練は？」

「やべつー..じゃあな園子ーー！」

俺は急いで部室に向かつた。

「はあー、しょうがないわねえ。一人のために一肌脱ぎますか！」

新一君、明日は園子のハグラブ作戦をたっくさん覚えてもらひなよ。-

#5 「今日は園で明日は園ナードー?」（後書き）

新一「つたく俺がどんだけ疲れたか。。。

作者「。。。」

新一「おいおい！」

作者「次回は服部と和葉の話。」

新一「おいおい、放課後のデートは?」

作者「後回し。」

新一「はあ！？そんなあ～。」

作者「ではでは最後に決め台詞。」

新＆作「真実はいつもひとつ！」

#6 「WIDE-TYPE?」(前書き)

えーと、読みにくいかもせんが
どうぞよろしくお願いします。

「新一の家へ

「ほお～」つやえらい数の本やなあ～。」

「工藤君のお父ちゃん作家やからねえ～。」

俺と和葉は工藤の許可なしに家中を探検していく。

「見て平次、工藤君の机やよ。」

「おひ～和葉引き出し空けてみい～。」

「なんよ命令なんかしてえ～。」

和葉は引き出しを空けた。

「ん? なんやこれ?」

「これアルバムとちやつづ～。」

引き出しの中には一冊のアルバム

「はよー中見せんかい。」

「なんよえりつやー！」

和葉はぶすっとしながらアルバムを開けたんや。

「うわあ・・・蘭ちゃんは工藤君めっちゃかわいい。」

「ほんとビ」「人の写真やな。」

開いた一ページ全部一人の写真やつた。

「このところから一人は仲良かつたんやね。」

「わやなあ。」

「あの二人なんで付き合わへんのやろか。」

「工藤がいけないのとかやうか?」

「あんたもな。」

そついつて和葉は別の部屋に行つてしまつた。

「おー、またや和葉!」

「待ちませんー。」

「ん?」

「平次どうしたん?」

「見ろやこれ。」

平次が両手に持つたラブレターは一〇通ほどだつた。

「それって上藤君の？」

「あこつ……ねえちやんがおぬいがねーの？」

「しゃーなこやん、捨てるよつましあと廻りひよ。」

「なあ、和葉。」

「ん？」

「じれ見るや……。」

平次は和葉に新一のラブレターを手渡した
「中、見てみ。」

「分かった。」

文章の内容はとてもひどいものだつた

「なんやじれ……。」

“死んでくれませんか？”なんてラブレターやないやう。

「上藤君が帰つてきたら知らせなーあかんね。」

「ややな。」

なんぢやう……。

やな予感がすんのや。

工藤とねえひやんになにかあつたんか?

「学校」

「新一、今日トロッカナルンド行いりうよ。」

「いいぜ、じゃあ…30円…・・・だいがいい?」

「私が新一の家に行くよ。」

「分かつた。」

「あーお暑いですねえ。」

「園子…。」

「京極ひとせーも・・・たべ園子のやうー。」

「そりゃあもひり」「ひよお、昨日なんてねー。」

「おけ話かよ・・・。」

トロッカナルンドかあ。

結構楽しくなつやうだ。

「ねえねえ、新一。」

「なんだよ。」

「服部君と和葉ちゃんも一緒に連れてこよう。」

「えつ！」

二人つきりじやねーのかよ！

まあ、あの二人の仲を进展させるのも悪くないか。

いにま、家帰つたら書いとくからよ。

一
ありがと
新
一

せよこと不安てのか本音た

まあ、Wデータってことでいいつか！

俺と蘭は急ぎ足で歩いた。

早くトロピカルランドに行くために。

#6 「Wデーター!?」（後書き）

新一「おい、作者。」

作者「なに？」

新一「次回はなんだ？」

作者「次回は結奈と蘭のお話ですよ。」

新一「けんかさせんなよ。」

作者「ほいほい。」

新一「みんな、感想よろしくなつ!」

作者「ではでは決め台詞!」

新&作「真実はいつもひとつ!」

#7 「トーク前のひととわ」（前書き）

話の進み方が悪い気がします・・・。
すいません。

#7 「トート前のおとぎ話」

新一と別れたあと心を弾ませながら歩く道。

いつもの帰り道じゃないみたいー

和葉ちゃんと服部くんとそして

新一とトロピカルランドに行けるんだもん！

「ただいまー！」

「ねー、帰ってきたのか蘭。」「

「うん。」「

「今日の夕食なんだ？」

「」ねんお父さん、今日はポアロで食べてねー。」

「せっかく蘭ー。」「

「トロピカルランドに行くの、じゃあねお父さん。」

小五郎はポカーンと口を開ける

「分かつたよ、つたぐそーなうそーと呼べばよ。」「

「」ねん「ねん、じゃあ着替えるから。」「

ガチャ

どの服がいいかなあ？

少しでもかわいく見て欲しいし・・・。

けど気合入れすぎで引かれちゃつかむー

どうしよう〜〜〜〜〜〜〜

♪新一の家♪

「えつーートロピカル『ランデ』のへこみ〜

「ああ、蘭もくつかうよ。」

服部は難しい顔をしている

「どうした？ 服部？」

「ああーあんなあ工藤君、ラブレターの中に変なものがあつたんや。

」

「変なもの・・・？」

「和葉、後にしー、せつかく遊びに行くんやから。」

私は平次の顔があまりにも真剣やつたから工藤君に言ひのをやめた
んや。

平次がかつこよかつたつてのもある。

「新一、用意できたあ～？」

「蘭ちゃんや、まだ着替えてないのこい。

「蘭ちゃん、こめんなあ。まだ着替えて無いんや。」

「こいよ、待つから。」

私はどの服にしようか悩んだ。

平次・・・どうしたらかわいにって言つてくれるやう・・・。

「蘭ちゃん！」

「なに、和葉ちゃん。」

気がついたら玄関まで走つてた。

蘭ちゃんなら分かると思つたんや。

びついたら平次がかわいにって言ひとられるか。

「うわあ・・蘭ちゃんかわいい。」

テーマのジャケットにワンピース。

ほんのつパンクのチーク。

赤い口紅。

全部蘭ちゃんにびつたりで、私はつりやましかったんや。

「どうしたら、平次かわいいつて言つてくれるかな。」

「うーん・・・髪でもおろしたら?」

確かに私はずっとポーネテールやけど・・・かわいいつて言つてくれるかなあ。

「蘭ちゃん、私頑張るー。」

「じゃあ、着替えてきたら?..」

「うん!..」

トップスにピンク、真っ白なふわふわスカート

髪をおろしてバレッタつけて

メイクをした。

「和葉ー、いくでえ。」

「待つてなあ、今行く。」

私は走つて玄関に向かつた。

平次に見て欲しへつて

「『』めんなあ、準備に時間かかってしまった。」

「和葉ちゃんかわいいよー。」

「ホンマ? 蘭ちゃん。」

蘭ちゃんは頷いた。

「似合つてんじやん。かわいいよ。」

工藤君もかわいいって言つてくれた。

それなの。・・・。

「和葉、口に油ついてんで。」

「油? ?」

平次はほめてくれんかった。

「服部君、それはリップよー。」

「リップ? ? ほお~和葉がリップ付けるとせなあ。」

平次は私に似合つてるとも言つてくれんかった。

「・・・・・・。」

言葉が出なかつた。

「結構似合つてゐるで、和葉。」

「えつ・・・。」

平次は顔を真つ赤にしてた。

「じゃあ、行いつよ。」

私は嬉しくてたまらんかつた。

「平次。」

「なんや和葉。」

「おおきい。」

「なんや氣持ち悪いなあ。」

私はトロピカルランドに早く行きたくてたまらんかつた。

「ねえ、新一。」

「ん？」

「なんか誰かに見られてたよーな・・・。」

「氣のせいだろ、早くいこーぜ。」

「うん……。」

俺達はトロピカルランドに急いで行つた。

#7 「トーート前のひととき」（後書き）

新一「次回、どうどうWトーートだなつ。」

作者「けど邪魔者もいますよ。」

新一「次回はどうなるんだ?」

作者「#8「後をつける中学生」ですよ。」

新一「おいおい・・・。」

作者「ではではお決まりの・・・。」

結奈「新一さんだーいすきwww」

作&新「出でくんぬよ!」

大阪弁つて難しいですね・・はつー。

#8 「トロピカルランド到着ー」（前書き）

ええと、#7で言つてたタイトルじゃなくなりました。
すいません^ ^ ;

#8 「トロピカルワンド到着ー！」

新一さん、結奈はあなたが大好きなのに
どうしてパパを捕まえてしまったの？

教えてよ、新一さん

～トロピカルワンド～

「じゃあが、今3・00だから3・30まで全員行動で、3・30
からは。」

「私は新一、和葉ちゃんは服部君とトートよね。」

「わかったよ。」

俺は蘭と作戦を立てたのだ。

服部と和葉ちゃんをくつつけやるひとなー

作戦一「服部と和葉ちゃんに手をつながせよう大作戦ー！」

「いいか、蘭。」

俺は小声で蘭に言った。

「OKよ、新一。」

作戦1、開始！

「なあ、あのジェットコースターに乗ろ! つぜー。」

「私、乗りたい！」

「おお、楽しそうやないか。」

「うん、めっちゃ乗りたい！」

和葉ちゃんは「——」いつの平氣なのかな？

少し怖がってほしいんだけどなあ。

「新一、行こうよ。」

小声で蘭に伝える

「今だ蘭、俺の手を握れ！」

「うん。」

ギュッ

「ああ、行こつか。」

俺らは服部の方を見た。

「相変わらずラブラブやなあ、お一人さん。」

「いいなあ。・・・。」

おつ、
ナイス発言だぞつ 和葉ちゃん！

そのころ

「でも、JJのシルエットスターす」「JJと並んでるじゃない」

「結奈ちゃん、落ち着いてよ。」

たて園子ちゃん！綾奈待一の嫌したもの！

一時間前

「ハハ、お客さんって誰??」

「うわ、今日はストラントンカイターの娘なんだよ。」

ローズブランドとはバラを基調としたフサエブランドの次に人気なものだ。

「佐々岡結奈ですっ！ ようしゃべ、園子さん！」

結奈・・・・・どつかで聞いた名前ねえ・・。

「あー！新一君が好きな紺奈ちゃん？」

「そうなんです。好きなんです。」

そーいえば・・・新一君トロピカルランドに行くのよねえ。

私も様子見たいしなあ
・
・
。

「ねえ、綺奈ちゃん、トロピカルランドに行かない？」

「えっ？ 結奈とでいいんですか？」

「もちろん！」

あの作戦が実行されそうじゃない！

𠂔𠂔𠂔
•
•
•○

○
○
●
○
○
●
○
○
●
○
○
●
○
○
●
○
○
●
○

「あの、どうしてここに来ましたなんですか？」

「それは秘密よ、結奈ちゃん。」

つたく新一郎のやうにいんのよ・・・・・

「いた
・
・。
」

新一君、蘭と歩つなこじゅつせんじやない。

あれ？ 服部類と和葉ひやくもこのわねえ。

「ああー新一さんー。」

「まつて、結奈ひやん。」

まだ早いわ、もう少し後じやなこと。。。

「なんで？ 園子さん？」

「まだ早いのよ、まだ。」

結奈ひやん、耐えるのよー！

「あー、園子さん順番が来たよ。」

「ホントだ・・・よしー。結奈ひやん今口は乗つまへるわよー。」

「まつー。」

それにしておのつかわいいわねえ。。。

新一君にまつたいなこじやない。

「まつてー。」

「どうしたの？ 新一？」

「誰かが俺のうわさしてんのかも・・・」

「熱でもある?」

「平気だよ。」

それより服部、早く手をつなげって!

スッ

「キヤアア!」

「どうしたー和葉ーー!」

#8 「トロピカルランド到着ー」（後書き）

作者「次回は和葉がつ！！」

新一「なんか、くしゃみが出るんだよ。」

作者「誰かがうわさしてんじやん？」

新一「そうかあ？」

作者「ではではいつもの決め台詞ー！」

新＆作「真実はいつも一つ！」

#9 「人質は和葉!」（前書き）

大阪弁に変なところが・・・すいません。

#9 「人質は和葉！」

ねえ、平次

私のことどう思つてんの？

私、分からへん。

もしなにかあつたら

平次に助けて欲しいんや。

「和葉！…」

「来るなあ！…」

「和葉ちゃん！」

「…！」

オタク風な男が和葉に抱きついたんや

なにやーとんのや和葉！

得意の合氣道でバシッヒー

「おつと、暴力はダメだよ君。」

男はポケットからナイフを取り出した

「ひー、なにすんのやー、触るなー、キシヨヽ悪いでえー！」

長髪でボサボサ、バンダナ巻いて大きなリュック

またにアキバつてやつちや

なんか腹とおてしゃ あない

むかつくんや

和葉に抱きつきおつて

「お前、武術とかやつとんのか？」

「小生は剣道やつりますよ。」

「じゃあ、剣道対決つてのはばいわや？」

剣道で負けへんで！

和葉、助けてやつから待つてろよ

「平次、私のことはいいからー。」

ホントは助けて欲しいけど、平次に怪我して欲しくないんや

平次が危険な田にあつのがいやなんや

「和葉。」

「なに・・・平次？」

「絶対助けてやつからな。」

「平次・・・。」

ピポパボ

プルルルル

「はいこちり捜査一課。」

「もしもし、僕です目暮警部。」

「おおー！藤君！どうしたんだね。」

「トロピカルランドのジョン・コースター前にナイフを持った危険な男が。」

「なに！すぐ行く！」

「警部、和葉ちゃんが人質にとられてしまいました。」

「分かつた、行くぞ高木！」

ガチャ

「新一、目暮警部に連絡したの？」

「ああ、けどその前に服部がなんとかしちまう。」

「お前、竹刀持つてるやないか。」

男の肩に竹刀が一本

「小生と勝負ある氣かい？色黒ボーッ。」

なんやこいつ頭平氣か？

「ああ、わかったわ。」

「じゃあ、瓶が勝つたらこの子を返すよ。」

「俺が負けたらどうすんのや？」

まあ、そんな」とありえへんけどな。

「この子をメイド喫茶のメイドにするよ。」

「メイド……」

男は「トレーレしながら和葉の頬に手を置く

「和葉に触んなボケ……」

「おつと、『おふ』めふ。」

和葉は泣き声で

あこいつ泣き虫だから……。

俺があん時手一つなこじりたらいとんなことにならなかつたさやう

うか

そんなの恥ずかしいやんか

今更手一つなぐなんて

「和葉を渡さへん。」

「平次……。」

おつー服部のやつっこいと呼んでやんか

「和葉をメイドなんかしたら店がつぶれるやないか。」

「なんよそれ……。」

「おこおこ……。」

「ナビだな、和葉。」

「なんよ。」

「渡さんのはホントやで。」

「えつ……。」

「泣かんと待つとや。」

「・・・うん。」

俺は男と勝負する!」とになつた

絶対負けへん!

「服部ー。」

「なんやー!藤。

「和葉ちゃんを助けてよ。」

服部なら勝てると思つたけど。。。

「あたりまえやないか。」

あの男、実力者だぜ。

『氣をつけろよ、服部。』

#9 「人質は和葉!」（後書き）

次回は一人の対決です。

和葉と平次はくつづけてあげたいです。
新一と蘭もですよ。

結奈は園子といいコンビって感じなので^ ^

#10 「勝負の行方」（前書き）

大阪弁つてやつぱり難しいなあ・・・。
あと何話かで平次と和葉は大阪に帰ります。
そろそろショッピングの話書かなきやへへ；

#10 「勝負の行方」

なあ 和葉

お前と俺は幼馴染やろ?

なんや分からんけど

ほかの男といつりするとおかつくんや

お前は俺にとつて子分やのにな

「平次！ 勝負なんてアカン！」

助けて欲しいけど・・・

「和葉、 大丈夫やで。」

平次の顔・・・ 真剣や

「私と助けんかつたら合氣道で動けんよーにしてやるー。」

だから助けて・・ 平次

「素直じやないやつちや。」

「えつ・・・？」

「助けてほしいんならわづ言えや。」

平次つてアホや・・・私は子分なんやろ?

優しすぎや・・・

「キヤアアアアアー！女の子が人質に！！」

「なによあいつ！」

「キヤー！キヤー！」

トロペカルランドはパニック状態や

「じゃあ、行くでオタク。」

オタクは和葉を放したんや

「小生も行くよ、色黒ボーイ！」

色黒ボーイって言つたボケエ！――

「面――小手！胴！」

なんやこいつ全部すんなりかわしあつて

「服部――油断すんなよ！」

工藤、油断なんてせーへん

大丈夫や

「服部くーん！がんばれーー！」

「ねえちやん、おおきに

「キャーー！服部君じやなーい！がんばれーー！」

「さー、あの集団なんや

工藤とねえちゃんの後ろに20人くらい俺の名前呼んでるんや

「色黒ボーカル、小生の方が上手だねー！」

「なんやでー！」

「めーんーー！」

「平次いいいいーー！」

和葉、心配すんな

バシツ

「なにー！」

「これくらー、受けられん訳ないやろーー！」

ふうー危ないとこやつた

こいつなかなかやるやないか

「なあオタク。」

バシツ パンツ ガツ パシツ

「なんだい色黒ボーイ？」

和葉は絶対渡せへん！！

ハシツ ガツ ハシツ

平次

エシニー

一面あり！一本！！

和葉は笑顔で立ち上がり、大きな声でそういった

- 小生の・・・負け？

「アーティストたち」

ヰヤニ脛部ぐんかニシニ!

- ۱۰ -

「平次！！」

和葉は俺によりかかつてきたり

「アホッ…へつあすがや…」

「どひちがアホや…。」

和葉はムスツとじてゐる

「見ゆや和葉。」

「なんよ。」

「「」のお守りがあつたから勝つたのかも分からへん。」

「それ…お守り…持つてくれたの?」

「平次、それ。」

「「」れないとこつとも変な目え遭つからなあ。」

「…・・ありがとお平次。」

「和葉ちゃんーー。」

「蘭ちゃんーー。」

二人はギュッと抱き合つた

「和葉ちゃん、ここにどひしあやう?」

「工藤君……」こつさなあ。」

「ひいいいい！……小生は君を解放したじゃないか。」

和葉の皿は怒つてゐる

「あんなあ、一発やつとかんと。」

バシッ！

「氣い済まへんのや。」

バタッ

オタクは倒れてもうた

和葉の本気は痛いでえ

俺は寸止めしてやつたけどなあ

「和葉。」

「なに？』

ギュッ

「平次……」

「子分は守つてやんなきやあかんやろ？』

おおー。といつも手をつないだぜー！

作戦1 「服部と和葉ちゃんに手をつないでもらおう大作戦」成功！

#10 「勝負の行方」（後書き）

新一「次回あたりで結奈ちゃんが出てきそうだけど？」
作者「でてきまーす^ ^」
新一「笑顔で言うなよ！」
作者「13話で結奈のことが分かりますよ。」
新一「じゃあ、決め台詞いつちゃうか！」
作者「それではいつもの決め台詞！」
新＆作「真実はいつもひとつ！」

#1-1 「新一と蘭へ約束へ」（前書き）

題名と話に関連性が . . . ^ ^ ;

#1-1 「新一と蘭の約束」

その後日暮警部と高木刑事が来て、オタクを連行した。

オタクは大規模な企業に失敗したらしい。

その後メイド喫茶を経営。

オタク達の間では方言を喋る女の子が人気らしい。

そこで大阪弁を話していた和葉ちゃんに手を出したらしい。

つたく人騒がせなオタクだぜ。

「あー、楽しかった。」

「あのコースター結構楽しいやんか。」

俺達はオタクが連行された後、ジェットコースターに乗った。

結構スリルがあつて楽しかった。

「じゃあ、こつからは別行動やな。」

「ああ、そうだな。」

「じゃあね、蘭ちゃん。」

「うん、和葉ちゃん。」

俺等は服部たちと別れた

「ねえ、新一。」

「ん？」

「どこに行こうか？」

「うーん・・・どうしようか。

「お前の好きなとこでいいよ。」

「じゃあ・・・観覧車かな？」

「決まりー。じゃあ行くか。」

俺達は観覧車に向かった

「その」

「園子さん、観覧車行こうよ。」

「そうね、いきましょうー。」

俺達は観覧車乗り場に行つた

「ふうー着いたあ。」

「結構遠かつたね。」

「ああ～疲れたわ～。」

「結奈もお～。」

えつ・・・今の声

俺等は後ろを見た

「ああ～園子じゅねーか！結奈ちゃんもいるし。」

「なんで？？」

「げっ！結奈ちゃん、逃げるのよー。」

「ええ～・・・分かりましたあ。新一さんバイバイ、蘭さん明日の約束忘れないでねえ。」

二人は猛ダッシュで逃げていった

つたく園子のやうー・・・。

俺等が「ここにいる」と知つてたくせによお。

「新一、のうつー。」

「ああ、わりいわりい。ボーッとしてた。」

「もへ、早く早くー。」

蘭のやつやけにテンション高くなあ。

まあ、いいけどよ。

「わあ～・・す」こす」こ。」

「おこおこ、まだ3メートルくらいしか上がってないぞ。」

「見て見て！あれ服部くんと和葉ひやんよー。」

あいかわらず目いいなあ・・・。

二人はアイスクリームを食べていた。

「新一、服部君を見て！」

「えつ？」

なんと服部が和葉ちゃんのアイスを一口もらってたのだ。

すつゝい進歩だなあ・・・。

俺も頑張んなきゃ・・・。

「あのひ、蘭。」

「なに？ 新一。」

「俺・・・。」

だあああああ！恥ずかしくって言えねーよー。

「なによおひたまつりやつてえ、変な新一。」

「いや、なんでもねえ。」

結局言えなかつた・・・・。

「なあ、蘭。」

「なに？』

「好きなやつ・・・・いるか？」

「つーなにバカな」とこつてんのよー。」

「本氣で聞いてるんだ。」

俺は真剣に聞いた

まさか他に好きなやつがいるんじやないかつて

「・・・一ぬよ。」

「えつ？」

「誰かはいえないけどね。」

まさか・・・俺？

いや、そうじゃないかもしれない。

「俺、蘭に勝つて欲しい。」

「えつ？」

「結奈ちゃんとの決闘、蘭に勝つて欲しい。」

「新一。」

「結奈ちゃんには悪いけど、俺が好きなのは・・・。」

「いえない・・・恥ずかしくってたまんねー。」

「新一。」

「ん？」

「新一の好きな人の名前、決闘で勝つたら教えて欲しいの。」

「蘭・・・いいぜ教えてやるよ。」

「そんとおまでにいい台詞考えとこいつと。」

「絶対よ、絶対！ほら指きづー。」

「分かったよ。」

『指きりげんまん嘘ついたらハリセンボンの一ますー！指切つたー！』

「なんか・・・ガキみてえ。」

「ホント・・・普ッ。」

『アハハハハ』

下に着くまで他愛の無い話をたくさんした。

たくさん笑った。

すっげえ楽しかった。

蘭といふ時が一番楽しい。

決闘の日に伝えなきや・・・ん?待てよ・・・。

「なあ、蘭。」

「なに?新一。」

「決闘つて・・・いつだ?」

「えつ?・・・知らない!」つだりうへ。」

おこおい・・・。

「けど明日見かけるか?」

「それもやーだな。」

また笑う

蘭の笑顔が好きだ・・。

そんなこと口が裂けても言えねーけどな。

「新一、着いちゃったね。」

「ああ。」

「楽しかったね。」

「ああ。」

「今度は・・・二人で行こうね。」

「そうだな・・。」

俺等はまた手をつなぎ、遊び回った。

服部達・・・楽しくやつてつかなあ。

またケンカしてたりして・・・。

まあ、あいつらひしいか。

「新一、アイス食べよーよ。」

「ああ、俺チヨ。」

「私は二年生よっかな。」

今日は楽し〜。。。

明日は園子と行くんだった。。。

今日のこと怒りとい。

つたぐ・・・あいつ。

「蘭、次どこ行く?」

「んーと・・展望台。」

「じゃあ・・行くか!」

「うんー。」

#111「新一と蘭の約束」（後書き）

新一「次回はなんだ？」

作者「平次と和葉の話ですよ。」

新一「じゃあ、決め台詞・・・」

作＆新「真実はいつもひとつ！」

#12 「和葉の鼓動」（前書き）

タイトル微妙かも・・・；

#1-2 「和葉の鼓動」

オタクから守つてくれた時の平次は
すうじくかつこよかつたんや

嬉しかつた

「なあ、平次。」

「なんや?..」

「アイス食べへん?」

「いいけど。」

「私、苺がいい。」

「俺は・・・レモンやな。」

「ちよつと待つてて、買つてくるわ。」

「藤達・・・つまくやつといひやうか・・

ちよつと氣になるな

「はい、平次。」

「おおあい。」

パクパク

「おこしーーー」の甘やかまらへん。

「そんなつまいんか?」

「うふ、 むつめつむしゃおこしー。」

ちよつと食べとおなつてあた・・・

「和葉、一口くれ。」

「ア、アホーじ、自分で買えやあ・・・。」

ビキニビキニビキニ

わへ、なんやねん平次のやつ

それじやあ間接キスやん

「なにボケーっとしてん?」

「なーーボケーとなんてしてなつ・・・。」

パクッ

か・・・間接キスやん!

「んーー確かにつまいなあ。」

あかん・・・デキデキある・・・

「・・・アホ。」

「和葉、レモン食べるか?」

「いい・・・。」

「んな」「デキデキしてんの」

平次の食べたら

デキデキが止まらなくなる

「じゃ行きたいんや?..」

「えつと・・・。」

デキデキして顔も見れへん

「あ・・・あれつ!」

私はてきとーに指を指した

「ホラーハウスやないか。」

「あれでいい。」

「じゅあ決まりやな。」

ん？和葉つて」——いつの平氣やつたか？

まあいいか

「ホラーハウスの中

「キヤアアアアアアアアアアアアアア——！」

「落ち着けや、和葉……。」

あかん……ダメや——」

「キヤアアア！平次……首……首……。」

「落ち着けや和葉！」

「だつてだつて……。」

「ほり、行くで。」

平次はもつとしつかり手を握つてくれたんや

嬉しくてたまんなかった

「なあ……平次。」

「なんや、やつと落ち着けたか。」

「工藤君と蘭ちやんが付き合つたり……。」

「付き合つたら・・・なんや？」

「平次の・・・好きな人教えてほしいんや。」

「！！」

なに言うとんや和葉！

俺は好きな人なんて・・・

「・・・じゃあ初恋の人でいいから教えてや。」

「！！」

アホぬかせ！

俺の初恋の人って・・・

お前やないか！

言えへん・・・

恥ずかしいやないか

今、お前は子分なんや

そりや、子分や

「・・・分かつた。」

「えつ？」

「上藤となえちゃんが付きおつたらでこいんやな？」

「やいわけど・・・いいの？」

「付きおつたらな。」

「うわ・・・平次の好きな人が聞けるんや！」

「いじつ、平次。」

「なんやこいつ・・・急に元気になつおつて

「出口」

「次、どこ行くん？」

「バイキングにでも行くか？」

「あのおつきい船の乗り物やろ？」

「ああ、そうや。」

「じゃあ・・・行くか。」

私達は手をつなぎながらバイキングに向かつた

平次も「機嫌やし、今日は楽しい日や

誘ってくれた工藤君のおかげやな

あ
り
が
と
お

「なんでもないっしー。」

「なんでもないっしー。」

ほんまにありがとう

#1-2 「和葉の鼓動」（後書き）

新一「はあ～あいつらも頑張ってなんなあ。」

作者「次回、結奈の思いが分かります。」

新一「へえ～・・・気になるなあ。」

作者「ではではいつもの決め台詞。」

新＆作「真実はいつもひとつ！」

#1-3 「結奈の思」（前書き）

結奈が新一を好きな理由やどうして出合ったかとか
そういうことを書きたかったのでこの話を書きました
笑いがありません・・・すいません！

#1-3 「結奈の思い」

結奈、今

すうひじく寂しいよ・・・。

ねえ、新一さん

私を助けて・・・。

（10日前）

「犯人はあなただ！佐々岡さん！」

新一さんはパパを指で指し、そう言った

「うそだよ！パパが人殺しする訳ないもん！」

私は必死に新一さんに訴えた

けど、新一さんは言つた

「佐々岡さん、この世に死んでいい人間なんていないんですよ。」

違うよ！パパは・・・パパは・・・

人殺しじゃないもん！！

「・・・自首します。」

「つやー、つやよパパー！」

「「めん、結奈……ママ。」

「あなたーーー。」

パパは……メイドの木戸ひかるを殺したの……？

「パパ……。」

後で新一さんに電話で聞いたの。

パパは、木戸さんが結奈を殺そうとしているのを知ってしまったんだって
だって

パパは結奈を守るために人殺しをしたんだって

結奈は受話器にじゅうじゅうと……

「「あんなさい、パパ。」

その言葉を何十分繰り返したんだりつ

新一さんはその言葉をじゅうじゅうと聞いてくれた

「結奈ひかる、もう泣こいやだめだよ。」

「……新一さん。」

「なに？ 結奈ちゃん。」

「あらがとう・・・。」

あなたの優しさが温かくて

一緒にいられたらいつて思った

けど、結奈・・・あなたにひどいとしたわ

あなたがパパを連れて行つたのが許せなくて

あなたに『死んでくれませんか？』って手紙を郵便受けに入れてしまつた

謝りたくて

謝りたくて

あなたに謝りたくて

あなたの家に行つたの

けど、あなたには

蘭さんという存在があつた

結奈には

新一さんが必要なの

だからキスした

蘭さんの心を傷つけてしまったけど

あなたが欲しかった

あなたが好きなの

あなたが蘭さんを好きだとしても

結奈は新一さんが好きなの

けど

あなたはさつきも

蘭さんといった

なんで

なんで結奈じやだめなのーー！

「結奈ちりん？？」

ハツ

「園子さん・・・なに？」

「なんか怖い顔してたから、平氣?」

「うん、それよつもう一回ジヒットコースター乗らない?」

「いいわねえ・・・よしつ、乗るわよー。」

結奈・・・今は樂しいよ

園子さん、優しいもん

新一さんは

蘭さんとの決闘に勝つたら

手に入る

だから頑張る

結奈、頑張る

「園子さん、速くこりゃー。」

「はあはあ、若こつていいわねえ・・・はあはあ・・・。」

蘭さんに言おつ

明後日に決闘しよう

明日はショッピングをめこづぱに楽しんで

明後日は決闘であなたに勝つ

「負けない・・・。」

#1-3 「結奈の思い」（後書き）

平次「はあーあのラブレターは結奈つづいた女が書いんや」「

和葉「工藤君ももてやなあ。」

作者「平次君もですよ、和葉ちゃん。」

和葉「そなんよ。」

平次「なんで俺ももててひつてことになつとんのや。」「

和葉「だつて、さつき服部くへんとか言われてたやん。」

作者「このままだと喧嘩に・・では決め台詞ー。」

全「真実はいつもひとつー。」

#14 「最後のジンジャー」（前編）

話にまとまつが無くなってしまったの反省です・・・。
次回はおもしゃくします、はい。

#1-4 「最後のジンギスチトースター」

「平次、あの「ースターもつ一回乗らへん?」

「ああ、それはいい考えやなあ。」

「新一、もう一回ジンギスチトースター乗らない?」

「ん? こっせ、じゃあ行くか。」

「うふ。」

「楽しみやなあ・・・わからずつと乗りたいて思つとつたんや。」

「俺もや。」

「ん? こっせ、じゃあ行くか。」

「いたつ・・・。」

「あつ、すんません! 前見てなかつたもんで。」

「うふ。」

「なんやー藤やないか。」

「蘭ちゃんー。」

「和葉りやんー。」

せつせつまくいったみたいだな、服部

そつせつまくいったみたいだな、服部

「平次、私蘭ちやんの隣で乗るから。」

「新一、やつこいじだか。」

「おーおー・・・・

なんで俺が服部と隣なんだよ・・

まついつか

「なあ、工藤。」

「あ?」

「うー、結構楽しそうだね。」

「やうだろ?」

「ああ、また来たいなあつて思つたといひや。」

服部達・・・進展したみたいだな。

「和葉ちゃんと一緒にでか?」

「う、ドアホ……そんなやないゆーてんやうー。」

顔、赤いぞ・・・服部

けど、俺も結構楽しかった

今度は蘭と行くつと思つ

決闘の勝利が決まつたらな

「うーん！――

おこおい・・この声

「園子！――結奈ちゃん！。」

やつぱり・・・

「蘭さん、決闘のことなんだけどお。」

「結奈ちゃん、決闘つていつの？」

「明後日でもいいですかあ？」

明後日！？

また急な話だなあ・・・。

「和葉。」

平次は「うーん」とて手を上下に動かした

「なんや?」

「決闘つてなんの!」
「あひりや?」

「私も知らんのや。」

「後で工藤に聞いてみるしかないみたいやなあ。」

「わうやね。」

たぐらむ一人

笑顔の結奈ちゃん

とまびうの蘭

にせにやしづながいひつちを見てくる園子

だーーー前も「んな事あつたぞーーー

「なにボケーっとしてるんや工藤! 次やぞ次ーーー

お前はいいなあ・・・

俺は俺で苦労してゐんだよー

「新一さん・・・。」

「なに?」

「・・・いいえ、なんでもありません！」

「

言えなかつた

”ごめんなさい”

この一言だけなんだよ

結奈が悪いのに・・・

”死んでください”

こんな言葉・・・口にしてもいけない

書き言葉で表してもいけない

「おっ、スタートや！」

服部・・・なんて『機嫌なんだろう

ガタン　ガタン　ガタン

「し・・新一・・。」

「お前・・・も乗つたじやねーか。」

つたく・・・相変わらず怖がりだなあ

「園子さん。」

「ん? なに?」

「今日は・・・ありがとうございます。」

卷之二十一

ガタン・・・

「ひやつほーい。」

蘭のやつ・・・すつ
げえ悲鳴

「なんで落ひるんやーーー..」

「あたりまえやろー。ジユット」「一スターなんやから。」

一
いえ
—
い！

一
キヤツ！こわい！

みんな楽しんだみたいだな

よかつた

まいいろいろあつたけど

服部たちも発展したし

めでたしか・・・

「新一さんつ、蘭さんつ、関西のおねえちゃんと平次さんーバイバイ」

「じゃあな、結奈ちゃん。」

「なんで私は関西のねえちゃんなん?」

「しゃーないしゃーない。」

俺達はトロピカルランドを後にした

「ほんまに楽しかったなあ。」

「あつ、私買い物しなきゃいけないんだ。」

「そーなのか?」

「うん、だからバイバイ。」

「じゃあな。」

「バイバイ、蘭ちゃん。」

「じゃあなーねえちゃん。」

俺達は蘭と別れ、家に帰った

そのあと俺がどんな目に遭つか…………

#14 「最後のジェットコースター」（後書き）

新一「結奈ちゃんって謎めいてるなあ。」

作者「あれ？前話で大体分かつたかと。。」

新一「そうなのか！？」

平次「工藤、前話を知らんのか？」

新一「。。。。」

作者「まあ、みなさん評価よろしく！返信するから。」

和葉「ではではいつもの決め台詞や！」

平次「和葉！いつのまに！」

全「真実はいつもひとつ！」

#15 「星空の下の話」（前書き）

今考えたら・・なんでキスされたとき結奈が
分かんなかつたんだろ？・・失敗ですねえ^_^；

#1-5 「墨鏡の下の話」

辺りは真つ暗

空には綺麗な星

家に灯る明るい光

「上藤君。」

「Jの姫・・・」

「なんだよ・・宮野。」

「Jの手紙、可愛い子から預かったわよ。」

「ん?」

「おひ、ねえちやんJの前はサンキューな。」

宮野のやつ・・・相変わらずシンシンしてんなあ

「別に、それより和葉さん。」

「なんや?」

「データ・・・楽しかったみたいね」

宮野は微笑んだ

「 もお・・・なんでもむる四通じなよやな。」

「 なんやなんや?」

「 平次には関係あらへん。」

和葉ちやん・・・笑つてんじやん

「 服部君。」

「 なんや・・・ねえーちやん・・・。」

服部・・・咲手なんだよなあ 四通の口と

ん?なんかひそひそ話してんなあ・・・。

「 和葉ちやんの」と、幸せにしぃなをこぶ。」

「 ...」

「 工藤、家開けりや。」

ぬつ・・・服部のやつ顔真っ赤だなあ

「 くこくい・・・。」

俺ん家だぞ・・・おこねい

ガチャ

「上藤、おとでのおーちゃんの重つた」と教へてやるわ。」

「ああ・・・。」

「服部のやつ・・・なに言われたんだ?」

「それよか、決闘ってなんなん?」

「ああ・・・実は・・・。」

「だいたい分かつておたで。」

「え・・・分かつたのか?」

「上藤を、結奈つづりやつとなべ一ちゃんで取つ合つてんやうへ。」

・・・図々じやねーか

「わいだよ・・・。」

「上藤君は蘭ひやんを取るんやうへ。」

「取るとか取らねーとかあこひは物じやねーかい。」

「かあーよくへ言ひや。」

「かつじー・・・。」

「明後日なんやう? 決闘。」

「ああ、もうだけど。」

「和葉、明後日までいてもいいか?」

「やうやく蘭けやんの応援したいけど……。」

「おこおこ……勝手に決めんなよ

「ナビ、上藤君に悪いやん。」

さすが和葉ちゃん……

「かまへんかまへん、上藤もあと一皿へりこ置いておひるねか。」

「いいの? 上藤君……?」

「あと一皿へりこなり……。

「ああ、しゃーねーからな。」

「平次、明日どうか行かへん?」

「またかいなあ……まあ暇やしええけど。」

「ふあーあ……ねむなつてきた。」

「もう寝ひや、疲れたんやね。」

「うそ、ねやすみこ。」

バタン

「……寝るわけないやん。」

和葉は一人がいる部屋のドアによりかかって聞き耳をたてている

「で、面野が言つてた言葉つて?」

「…………。」

(なんやう……氣になるなあ。)

「和葉ちゃんの」と、幸せにしながら。」

「面野、うーーー。」

(志保ちゃん……そんなこと言つたん!?)

「工藤、結奈つづらーやつになんでもそれてなこやうなあ。」

「…………。」

沈黙

ガチャーン

「工藤君、教えてえなあ。」

和葉は部屋に入った

「なんや……和葉寝たんとかわいがー…?」

「寝れなくてな、戻ってきたんや。」

あ、あかん・・さつきのねえーちゃんの言葉聞かれたかもしれん

「和葉・・どうから聞いてたん?」

・・・やっぱこんどけやうか?聞かれとつたら・・・

「工藤、結奈ひつゝーやつになんにももれてなこやうなあ、つてといやで。」

「わかつこてもうた

「そか、それよか工藤ーはよー教えろやー。」

「・・・キス。」

『キスー?』

「ファーストキスを奪われたんだ・・・。」

「はあーなにやつてん工藤ー!」

「あれは不可抗力つてやつで・・・。」

詳しへ説明中・・・

「まあーなるほどな。あー」

「まあ、やつこいつだ。」

「ト藤君、結奈ちゃんと知り合になん?」

「ああ、十日前に事件があつたわ。」

「結奈ちゃんの父さんが犯人ですか。」

「結奈ちゃんの父さんが犯人ですか。」

「やつこいつたんか・。」

「結奈ちゃん・。」

「ナビ、俺は結奈ちゃんの顔あんまり見てなくつてた。」

「ああ、キスされたときには結奈ちゃんが分からなかつたの?」

「なんやされ。」

「ふーん・。」

「俺、そろそろ寝るわ。」

「 もめ。 」

「 もやくみこ。 」

バタン

「 ・・・・・・。 」

今・・一人つきつやん

どなこじょつー！

「 く・・藤君もかわいがりやなあ・・。 」

「 もうやなあ。 」

「 私、もうやる黙つなつておた。 」

「 僕もや。 」

「 おやすみ、平次。 」

「 おやすみ。 」

明日は楽しみやなあ。

蘭ちゃん、結奈ちゃんと出かけるひっこなあ。

藤君は園子ちゃんに付かれてみたいやなあ。

れつやの言葉・・聞くんやなかつたわ

恥ずかしくて眠れへん！

#15 「星空の下の話」（後編）

新一「次回はなんだ?」

作者「結奈と蘭のショッピングですよ。」

新一「あつー!」

作者「な、なんですか?」

新一「宮野からもらった手紙・・読んでねー。」

作者「#17辺りで読ませますよ。」

新一「そつか、じゃあいつもの決め台詞ー。」

作&新「真実はいつもひとつ!」

#1-6 「新一ちゃんが好きですか?」（前書き）

蘭の言葉使いがよく分かんないへへ；
あと少し続くから最後まで見てやってね。

#1-6 「新一さんが好きですか？」

快晴な青空

小鳥のさえずり

なんていい天氣だらう

「お父さん、行つてきます。」

「つたく今日は誰と行くんだよ。」

「佐々岡詰奈ひさしほ子よ。」

「えつ・・・・。」

「じつしたの？お父さん？

急に顔色変えひきつて・・・

「確か、十日前くらいに事件があつたんだよ。佐々岡さん家で。」

事件・・・？

「そういえば、新一は事件で詰奈ちゃんに会つたんだよね。

「せうなんだあ・・・。」

けど、詰奈ひさしほ元気よね

「あつ、むう行かなべちや。」

「ああ、じゃあな。」

私は走つて新一の家に向かつた

「五分後」

「蘭せーん！」

「ー。」

ピンクのフロフロワンピース

白いフリフリカーティガン

「蘭さんかわいいですよ。」

「あ、ありがと。」

結奈ちゃん芸能人みたい

「じゃあ、行きましょうよ。」

・・・・・負けたかも。

「今日はどこ行くのかな？」

「んー原宿がいいですぅ。」

「いいわよ。」

正直言つて・・・意外だわ。

銀座とか新宿のブランド店を回るのかと思った。

「蘭さん、電車が来ましたよ。」

「あつ、『めん』めんボーッとしてた。」

さつきからいろんな人がこっち見てるよ。

結奈ちゃんが可愛いからかな？

ガヤガヤガヤガヤ

「着いたー！」

見るとこ人、人、人、人。

「蘭さん、行きましょうー！」

私は結奈ちゃんに引っ張られた

「きや～この服かわい～。」

「ホントだね。」

聞いてみようかなあ。

「あのや、結奈ちゃんの家で事件があつたって本物へ。」

「うーーー。」

「聞こひや まづかつたかなあ？」

「あとで、聞こますね。」

「う、うん。」

聞いて平氣だつたのかな？結局。

「結奈ちゃん・・・。」

「はー？」

かいつ聞いてみたかつた」とある

「新一のビームが好き？」

「全部だよーー。」

「えつ？」

「だつて容姿も性格もみんなみんな好き。」

「やつか。」

「ひりやめっこ。」

好きって素直に言える結奈けやんが

新一のファーストキスを奪つたのは許せないけど

ひひひまじい。

「じゃあ、蘭さんは？」

「えつ？」

「新一さんが好きですか？」

「えつ？」

いつもいつも

ただの幼なじみって言つてきた素直じゃない自分

ずっと好きだと思つてきた素直な自分

「うめんなさい、ショッピング中なのに。」

「う、ひひさ。」

と言えなかつた

”新一のこと好きよ”つて

言えなかつた

「 もやークレープだよ。」

一
あれ?
「

クレーナ屋なのにいすとテープルがあるんだあ？

「這就是你家的嬪嬪樣。」

わあ、店員さんみんなお辞儀してますよ。

私
いーものやーお願しね

いもの！常連さんなんたま

和
ヲ
ミ
ニ
ハ
ナ
ナ
ニ
レ

九月三十日

卷之八

卷之三

卷之三

私のノハは遠捕されてしまったの

二
六
?

結奈ちゃんのお父さんが？

「私の家にはお手伝いさんがいたんだけどねえ。」

「うん。」

「那人、私を殺そうとしてたんだって。理由は知らないけど。」

「じゃあ、お父さんは結奈ちゃんのため?」

「……うん。」

「そんなことがあつたなんて……。」

「けど、私を支えてくれたのは新一さんのお優しさだった。」

「……。」

「新一さんが必要な、新一さんの優しさが必要なの。」

「そんな理由があつたなんて……。」

「ファンだと思つてた……。」

「おまたせしました、チョコバナナでござります。」

「あつがとうござります。」

「慣れないなあ……。」

「あれ? クレーーって手に持つんだあ。」

「へつ？」

「お嬢様、スペシャルクレープでござります。」

「ありがとうございます。」

スペシャルクレープ！？

すいご・・・。

お皿に乗つてゐるよ・・・クレープが。

ナイフとフォークで食べてゐるよ。

「それ、こへりや。」

「えつと・・4000円だな?」

4000円ー?クレープなの?ー?

よく見たら・・・キャビア乗つかつてゐるよ。

「んーおこしー。蘭さんも頼めばこいのこー。」

「い、いこよ・・。」

ねむるべし、お金持。

#1-6 「新一ちゃんが好きですか?」（後書き）

新一「次は??」

作者「次回は、園子ちゃんとお出かけでしょ。」「

新一「まあな。。。」

作者「みなさん評価よろしくねえ」「

新一「してあげないと作者が泣くや〜。」「

作者「泣きません!じゃあいつもの決め台詞ー」「

二人「真実はいつも一つ!」「

#1-7 「結奈の手紙・園子の恋歌」（前書き）

珍しく園子が真面目？

ふふふ・・・。

ピンポンピンポンピンポンピンポン

「だーーーまだ9：00前じゃねーかああああーーー！」

「落ち着けや・・・工藤。」

「それにしてもまだ早いよねえ。」

ハンツ!

俺はドアを思いつきり開けた

新一君、遅いじゃない！

お前・・9・・30つて書いてたじゅねーか！」

たて今
9:30 時計止まつてたわあアハハ

卷之二十一

「ごめんね、時計変えてくる。それと。。。

「それとなんだよ？」

「詰奈ひさんから、手紙もひってない？」

「え？」

そーいえば・・富野が預かつたつていつ手紙。

差出人・・・結奈ちやんだつたなあ。

「あるけど?」

「じゃあ、後で持つてきてくれない?」

「ああ、なんでだよ?」

「いいから持つてきなさいよー。いいわね。」

「へいへい。」

なんで俺がお前の言つこと聞かなくちゃいけねーんだよ。

つたぐ・・・。

「じゃあね、9・30になつたら迎えに来るから。」

「ああ、じゃあな。」

園子はゆっくり歩いて帰つてつた。

つたぐ・・・マイペースなお嬢様だ」と。

「工藤、言ひ忘れてたんやね。」

「なんだよ・・服部。」

「ちよつと待つじき。」

服部は部屋を出ていった

「なんやうなあ。」

「なんだろ・・。」

バタン！

「これやこれ！」

「ああー、ラブレターかあ。」

「これ、中見てみい。」

なんだ？

一回封開けてあんじやねーか。

”死んでくれませんか？” なんだこれ？「

「いたずら」って度が過るんじゃないの? や? や? や?

— 工藤君、手に持つとんのなんせ? 「

「これが？綺奈ちゃんからだよ。」

「読んでもいい?」

「アホ！なんでお前はモード一いつ！」

「いいよ。」

「えつ？ いいの？」

和葉ちゃんは早速中を見て、読んだ。

『新一さんへ

”死んでくれませんか”って手紙は結奈が書きました。
ごめんなさい。けどね、結奈は・・・
新一さんが好きなんです。あの、事件の時から
蘭さんに決闘で勝つてみせます。

絶対勝つてみせるから・・・。

もし、私が勝った時は
頭をポンポンしてくれませんかあ？
寂しさが消えていくから・・・。
あなたが愛しいから・・・。

結奈より

「上藤君にべた惚れやん・・結奈ちゃん。」

「やうやな・・。」

「・・・結奈ちゃん。」

「なんか断りにくくなつてもうたなあ。」

「ああ・・。」

ピンポンピンポンポンポン

「ザッ… わうわやがつたー!」

「まあ、 カウントをこなすのが早い。」

「もうだな、 ビックリあと十分だしな。」

俺は手紙とバッグを持って玄関に行つた。

ガチャ

「じゃあ、 行くか。」

「わうね、 それより手紙見せなさいよ。」

「へこへこ。」

園子のやつ・・・ やけに真剣に見てるじゃねーか。

「新一君。」

「ああ~。」

「蘭を幸せにしてあげてね。」

「え?」

今日はふざけてねーみたいだな。

「蘭は新一君の」とずつ見えてきたのよ。」

」

「11日前から好きになつたっていう女の子にのりかえないでね。」

「園子……。」

「私、一人のこと見てきたけどさつ。」

۷۰

「二人はお似合いだよ。」

「お前もな。」

「止め？」

「真さん、結構お似合いだぜ？」

「キヤー！ホント？それホント？？」

やばい・・テンションがやばい・・。

「……ナサ一ぱけいがこむ。いせ」

話・・・変えよ!。

「そーいや、今日どこ行くんだ?」

「え？ ああ銀座よ。」

「銀座？」

「あー、わざへ行こう。」

「へいへい・・。」

一時間後

「ねえねえ、この服よくなーい?」

「素晴らしい似合つてますよ、お嬢様。」

「あんた、それ本気で言つてんの？」

「あつたりめーだろ。」

「ふーん、じゃあ「れと」「れと」「れと」「れと」。

どんだけ買うんだよ・・・。

だいたいもう俺・・持てねーぞ。

両手に服、靴、バッグ、アクセ・・・ etc

「新一君、ありがとうねつ

お前・・・それが目的かよ。

「ルルルーセル前、なんで昨日アロピカルランニングしたんだよー。」

「ああ、結奈ちゃんが家に来てねえ、それから遊びついでに元気になつてさ。」

「ふーん。」

なんか怪しきけど・・・まあいいか。

「あのブーツよくない? ねえねえ行きましょう! よ。」

「むういいだねー。」

夜、新一が腕を痛めてしまつたのはいつまでもない。

#17 「結奈の手紙・園子の言葉」（後書き）

新一「あー腕いてー。」

作者「次回は和葉と平次がつ！」

新一「なんかあいつらの方が目立つてないか？」

作者「ギクッ！」

新一「お前、服部派だもんなんあ～。」

作者「あ、あはは・・。それではいつもの決め台詞ー。」

全「真実はいつも一つー。」

#1-8 「永遠の絆」（前書き）

題名の意味は・・・本文で！

#1-8 「永遠の絆」

なあ、平次

私、東京来てよかつたって思つたよ。

だつて今

幸せやもん。

「平次、今日どじ行へ?」

「サンシャインとかでいいんぢやうか?」

「水族館かあ、行きたい!」

和菓のやつ・・・」「ハハハしてんなあ。

・・・つて俺はあいつの親分や!

あいつは俺の子分や!

なに気にしどんのや!

「なにしどん?」

「なんでもあらへん!」

平次は自分の頭をポカスカポカスカ叩く

「せうなん?じゅあ行こ、平次。」

「あ、ああ。」

最近なんか変や。

和葉のこと意識しどるような・・・。

そりや、初恋の人は和葉や。

けど、今は子分や。

そうや子分や。

「平次、なにしどん?」

「ああー!工藤から鍵阿預かつといふー。」

「なにやつとん・・・。」

鍵かけな無用心やなあ。

留守番してもらう人・・・!

「和葉、いー」と考えたんやけど。」

「じゃあ、そのいー」とをはよーやつへ。」

俺はあるといひて電話をかけた

プルルルルル

「はい、こちら毛利探偵事務所ですが。」

「おひちやん、俺や。」

「お前、色黒探偵！」

「悪いんやけど、上藤ん家で留守番してくれへんか？」

「なつーなんで俺があの男の家で留守番しなきゃいけねーんだよー。」

「そやー今度家に来てや、オカンが言つてたん忘れとつた。」

「静華さんがつー。」

「留守番してくれたらな」

「分かつた、すぐ行くー。」

プツツ

おひちやんも単純やなあ。

オカンが美人とか言つてたなあ。

「あ・・・あれ見いー。」

和葉が指差す先には・・・

「ハアハアハアハア。」

「おひひひひん！」

全力で走る毛利小五郎

「探偵ボウズの家にいつやいいんだら?」

「わや。」

静さんに会える・・・。

「毛利小五郎ー」の家を守り、静華さんに会ってますー。」

「ほなな、おひひひん。」

「よろしくなあ。」

おひひひん、サンキューな。

おひひひんは今や人気の探偵や。

ねーちやんが町には毎日依頼が三件はあるじー。

まあ、俺の方が上やけどな。

～サンシャイン～

「平次、このクマノミかわいこなあ。」

「ややな。お前よりかわいいなあ。」

「なんやそれ。」

「ホンマやないか。」

「あー、お土産パーカーやないか

「和葉、ねーひかるにお土産買つたまつがいいんとちやうつか?」

「ややー忘れとつた。」

「ほな、行ひか。」

「蘭ちゃん、なにがいいんやう?」

「Jのストラップ、工藤にいいんとひきやう。」

「工藤君にタハリ合わへんよ。」

「へへへ。」

「じーせなり蘭ちゃんとペアにしてたり二二きりがう。」

「それもいこなあ。」

「あれ見こ。」

和葉が指差す方には・・・

「ラブラブペアストラップ……？」

「あれ、いいんとちやうへ？」

「和葉の割にはいいもん見つけるやん。」

「あんなあ。」

「和葉、これ欲しいか？」

「えつ……？」

まさか……」のラブラブペアストラップ？

「！」の一人の絆は永遠についてやつちや。」

「くつ……？」

「ラブラブペアストラップの隣にあるのが

二人の絆は永遠にストラップ。

「欲しい。」

「ラブラブやなくとも

絆は永遠つてのも嬉しいもんなあ。

けど……ラブラブの方がいいなあ。

「平次、私トイレ行つてくる。」

「気つけや。」

「分かつてますー。」

「これにしようか・・・。」

「すんません、これ一ひとつこれ一つ。」

「はい、しうりしうりお待ひトモ。」

（3分後）

「平次、買つたん？」

「まじ、クマノミがいいんやろ？」

「おおおー。」

「永遠の絆か・・・。」

今はまだラブラブやなくとも

いつか・・・な。

「平次もケータイに付けてや。」

「もう付けてるやん。」

ホンマや・・。

「私も付けよ。」

今日も楽しかった・・・。

「なあ、平次。」

「なんや?」

「楽しかつたな。」

「そやな。」

『ただいまー。』

「おお、おかえり。」

「おひちやん、サンキューな。後でオカシに言ひとへわ。」

「静華さん・・・。」

アカン・・・自分の世界に入つてもうた。

「ただいま・・・。」

「おお、工藤。」

「あれ?なんでおひちやんが?」

「おお、探偵ボウズ。じゃあ、俺は帰るわ。」

「は、はあ。」

バタンツ

「工藤君へのお土産あるんやで。」

「マジ?」

「ああ、これや。」

いるかヒシャチのペアストラップ

「こーわかは蘭ちゃんのや。」

「サンキュー。」

これがラブストラップってのは

二人は付き合つてから教えるってことで

明日は決闘やつたな。

がんばれよ、ねーちゃん。

「工藤君、明日決闘やね。」

「ああ。」

「私は蘭ちゃんの応援すんでー。」

「で、那儿で決闘やるんや?」

「帝丹高校の体育館を二時間貸切にしたらしい。」

「ほおーなんや規模が大きいやないか。」

「大きすぎな氣もするけどな。」

「私、夕食作るから待つてや。」

和葉ちゃんはルンルンしながらキッチンに向かつた

お前り・・今日はなにがあつたんだ?

#1-8 「永遠の絆」（後書き）

新一「次はなんだ？」

作者「えっと決闘前夜の話です。」

新一「へえー決闘もそろそろだな。」

作者「ええ、蘭ちゃんに頑張つてもらわないと。」

新一「じゃあ、いつものだつ！」

二人「真実はいつも一つ！」

ここにちは、奈津美です。

かれこれもう18話があ・・・と感動^_^

そろそろ決闘です。

もう少し付き合つて下さい。

この話の続編が決定しました。

タイトルは「ライバルは婚約者！？」です。

婚約者はファインセと読みます。

平次×和葉です。

いつか園子×真 もやりたいなあ・・・。

話が長くてすいません。

みなさんの評価が私の支えです。

評価はすべて返信していますので見てくださいね。

奈津美

#19 「決闘前夜」（前書き）

なんか微妙な話になってしまった。・・・。

#1-9 「決闘前夜」

俺は夕食を済ませてから蘭に電話をした。

”頑張れ”って言いたかったから。。。

「誰も・・・いないよな。」

今頃服部と和葉ちゃんはリビングでテレビ見てるし。

「ここは二階だし。。。

ピポパボピボバボ

「・・・あつ、蘭？俺だけど。」

『新一―どうしたの？』

「あのせ・・・。」

「そのこぶへ

「なあ、蘭ちゃんと工藤君の会話気になるんやナビ。」

「そやなー盗み聞きでもするか。」

「そやね。」

一人は新一がいる部屋の外で盗み聞き。

(盗み聞きなんて一回田やなあ。)

「あれれ・・・。」

『何?』

「明日の決闘で勝つたら、俺ん家でパーティしねーか?」

「へつ?」

「だから、俺ん家でパーティしないか?」

新一の家でパーティ?

楽しそう・・・。

『うふ、私も頑張らなくつちやね。』

「やべーな。」

『えつ?』

「俺のために決闘するなんて歴史に残つちまつせ。」

『な、なに言つてんのよ。』

~ドアの外~

「かつ」こなあ、工藤君。」

「なにが”歴史に残つちまうぜ”や。」

「平次もあーこいつ」と言ふんの?」

「アホ、俺はあいつと違つてキザやないからな。」

「平次が言つてたらおかしいもんな。」

「お前なあ・・・。」

蘭ちゃんがなに言つてんのかも知りたいなあ。

～部屋の中～

「で、結奈ちゃんとのショッピングはどうだった?」

『楽しかつたよー。』

「そつか、俺なんて園子に荷物持ひさせられて腕じてーよ。」

『園子だから、しょうがなこよ。』

「なあ、蘭。」

『なに、新一。』

「俺、応援してやつから頑張れよ。」

『・・・うん。』

「じゃあな、蘭。」

『ま、待つて…』

「ああ？」

『約束…忘れてない？』

「バー口一。忘れる訳ないだろ」

忘れらんねーよ。

『じゃあ、言つてみて。』

「ああ、えっと蘭が決闘で勝つたら俺の好きな人を蘭に教える。」

『正解！じゃあ明日頑張つじゃつからね。』

「おやすみ。」

『おやすみ…。』

ブツツ

ツーツー

電話の切れた音が

誰もいない部屋に鳴り響いた。

なんだか寂しく感じた。

「ドアの外へ

「蘭ちゃん勝つたら工藤君が山ちゃん…」

「ほおー工藤も大胆やなあ。」

「蘭ちゃんに勝つてもらわんと。」

ガチャ

「…」

「せつから盗み聞きしてただろ…。」

ゲツ！工藤や！

どないしよか…。

「たまたまや、ほな行こか和葉。」

「う、うん。」

ガシッ

「はーつとり…。」

「堪忍してやあ。」

「お前いい加減にしろおおおおおおおー。」

「うわああ。」

「この後一時間近く

工藤君の家の中で

鬼「」が続いたんや。

私は怒られんかったからよかつたあ。

「和葉も逃げやー。」

ガシツ

(えつ・・・・・)

「ひやくわに紛れて腕掴んだるよ平次・・・。

キヤキヤキヤキヤキヤキヤキヤ

(ああー・むづき・キヤキ・キシツ・ぱなしやー。)

「和葉。」

「なに?」

「楽しかったか?」

「あたりまえやないか！」

「待て！服部！」

「いい事考えたんやけど、平次。」

「ああ？」

「博士の家に隠れるんや。」

「おおー。」

その後服部達は博士ん家に行き

俺も追いかけた。

宮野が研究室から出てきて

” 静かにしてくれる？” と言

富野の言葉、あまりにも迫力があつたため

俺等は家に帰った

あたりはもう真っ暗

満月が町を照らす。

月があまりにもきれいで

俺等はベランダから10分ぐらいずっと見てた。

明日はとつとう決闘だ！

#1-9 「決闘前夜」（後書き）

新一「明日は決闘だ〜。」

平次「今日作者は休みやで。」

和葉「たまには自分達で話せつていうんや。」

平次「明日はねーちゃんの決闘やで。」

和葉「もう楽しみでしゃあない！」

新一「おいおい・・・。」

作者「誰が休みですと・・・。」

三人「！！そ・・・それじゃあいつもの決め台詞。」

全員「真実はいつも一つ！」

ここにちは。

奈津美です。

次回でとつとう決闘です。

まだ最終回まではちょっとあるかな？

もう少し付き合つてください^_^；

それと、コメントにはちゃんと返信しますので^_^；

見てみてください^_^

ではでは、次は#20で会いましょうw w

#20 「決闘當田」（前書き）

PCの調子が悪かったため、投稿が遅れました。
すいません。。。。

#20 「決闘場所」

ピチャーン

(ん・・い)は(だ)いだ?

辺りには綺麗な湖。

湖の周りには緑あふれる自然

花畠、山、川

とても綺麗な場所。

花畠の中に誰かいる。

「・・・・蘭?」

かわいい寝息をたてて寝る蘭

「蘭、起きるよ。」

「し・・・んいち?」

「おはよう。」

「もう、起きなきやね。決闘だもんね。」

「さうだな。」

「これで夢……？」

「やつだと想ひついでへ。」

「よかつた、新一に会えて。」

「えつ……。」

蘭が微笑むかうびくつした。

かわいかつた……。

「じゃあね。」

「ああ。」

ジロジリジリジロジリジリ
ジリリコココココココココ

「ああ、夢があ。」

やつぱりなつて顔して田舎ましを止めた。

まさか蘭も同じ夢を見てゐるじゃないかなんて思ひ。

ピンポンピンポンピンポン

「 · · · 蘭？」

まだ6・30だぜ・・・おいおい。

ガチヤ

一朝・・早くにすいません

立っていたのは中学生くらいの男の子

「俺、河合裕也」ついでしょ！ 結奈を返してやる！」

なんかが、一いし男の子たなあ

はるこ絹奈ちゃんとはなんともねーせ

文庫本

何に
絶えのめりて
新一
かに渴き

おのと 久田 実は

卷之三

卷之三

ピンポンピンポン

「はい。」

蘭だな、今度…。

ガチャ

「おはよー。」

「ああ。」

「蘭ちゃん、応援するでー。」

「俺も。」

「あつがと、みんな。」

俺たちは帝丹高校に向かった。

（帝丹高校・体育館）

「蘭、決闘って何時からだ？」

「え？ と・・・そりそり結奈ちゃん来るはずなんだけじ。」

「蘭ちゃん、おまたせしましたー。」

「結奈ちゃんー。」

「勝負方法を説明しますね。」

どんなんだろ・・・。

「倒れた方の負けです。」

へつ・・・?

「それだけなの?なんでもあり?」

「もちろんです。間接技でも足払いでも。」

空手って間接技あるのか?

「じゃあ、十分後に始めましょ!」

珍しく結奈ちゃんは

ぶつっこでもなく

真剣な皿つきで

蘭を見ていた。

「では、私は部室にこもせて頂きますので。」

結奈ちゃんは足音たてずに俺の前を通り過ぎた。

いつもと別人だった。

「工藤君、あの子雰囲気変わったなあ。」

和葉ちゃんも思つたか。

「俺もそう思う。」

「そんだけ工藤が好きって」
「ちや。」

俺は・・・蘭のことが。

「・・・そりかもな。」

結奈ちゃんは蘭のことライバルって思ってるのかな。

蘭に勝つて欲しい。

結奈ちゃんはどうなるんだ?って考えた。

これ以上好きな人を失つてしまつたらやばいんじゃないかなって

けど、平気だよな。

だつてあいつがいるから。

「新一さん!」

「裕也ー・やっぱ来ててくれたのか。」

俺は祐也に決闘のこと教えてたんだ。

結奈のこと好きだつていうから

決闘のことくらい教えたつていいよな。

「俺、結奈を応援します。」

L

^
-
-
-
?

「おーおい、結奈ちゃんが勝つわけやつたり…………。」

「好きなやつを応援するのが普通でしょ？」

二二〇

結奈ちゃんが本当に好きなんだな。

そこが分かったよ

工藤 二九が手たて

始めの位置に二二二人

一
はああああああああああ

氣合を入れる蘭

深呼吸する結奈ちゃん

「あと10秒で開始や！」

和葉ちゃんが言う

「試合開始！」
10・9・8・7・6・5・4・3・2・1！」

#20 「決闘當田」（後書き）

こんにちは、奈津美です。

PCの調子が本当に悪くて^ ^ ;
部活も忙しくつて^ ^ ;

大変です・・・。

だいたい25話を予定していますが。
それより多くなりそうです。
もう少しお付き合いで下さいませ。
評価の方もよろしくお願ひします。
では、次話で会いましょう。

#21 「怪我」(前書き)

タイトル微妙な点、反省します^ ^ ;

#21 「怪我」

「はあああーー！」

スツ

「うひゃあーー！」

バシッ

「すげえ・・・互角じゃねーか・・・。」

あの蘭の蹴りをかわすなんて・・・。

「なあ工藤・・・もしかして。」

「バーロー。蘭が負けるわけねーよ。」

俺は蘭を信じてるから

俺は蘭に託したかったんだ。

自分の人生を・・・。

「蘭さん、すいませんっ！」

ガツ

「あつ！」

結奈ちゃんは蘭に足をかけた。

ズサー！

「いたつ！」

蘭は思いつくり転んだ

蘭！

TURKISH

足首が赤い。

「タイムつていいのか？」

結奈ちゃんは頷く

「タイム！ 蘭、歩けるか？」

「平氣」

足を引きずる蘭

和葉ちゃんが蘭を支えてあげてる。

「ねーちゃん、大丈夫か？」

「ありがとう、服部君。」

俺は蘭に冷却スプレーをかけた後に包帯を巻いた。

「新一、心配してくれてるの？」

「バ、バーロー！あたりまえだろつ！」

ギュッ

蘭は俺の手を握った

「絶対勝つてみせるからね。」

蘭は笑顔で戻つていった

「試合開始！」

服部が言つた

「蘭ちやーんー。氣合や氣合ー。」

「ハアアアアアアーーー！」

バシッ

「ガハツ。」

結奈ちゃんのみぞうちヒットー！

「結奈ー！..がんばれー！..」

「裕也ー！..」

結奈ちゃんは素早く蹴りを蘭に

「うーん！..」

「平氣よ、新一。」

ズキッ

「つー..」

蘭は体制を崩してしまった。

「蘭さん、私の勝ちです！..」

蘭の目の前に蹴りがつ！

「うーーーん！..」

「ハアアアアアアアアアー！..」

蘭は結奈ちゃんの足をつかんだ。

蘭は結奈ちゃんに上段蹴り。

「ハツハツ！..」

「ぐつ・・・。」

「結奈ひめんにクリーンヒート・

結奈ひめんにクリーンヒート・

「結奈――――――」

「裕也・・・。」

なんで裕也がここにいるの・・・?

結奈の応援しにきてくれたの?

だめ、今は集中しなくちや。

新一さんが必要だから・・・。

「うう・・・。」

目が霞んできた・・・。

新一さん・・・。

「結奈―――がんばれ――!」

「えつ・・・。」

裕也・・・どうしてそんなに応援してくれるの?

結奈は、嬉しこよ。

嬉しそうな上。。。

「うつやあああーー！」

バシッ

「ぐつー！」

足首に直撃した。

蘭はまた体制を崩した。

「はあああーーー！」

バンッ！

「かかと落としや・・・。」

服部は言つた。

「う・・・蘭ー！」

「くつ・・・。」

バタン

「あかん、あと10秒で立たな負けてしまつやないかー！」

「蘭ちゃんー！」

「うーん！」

蘭は立ち上がりつとめて立てる。

足が痛いんだろ？

顔が引きつってこる。

蘭・・・もう無理すんな。

わへ、いいから・・・。

頼むから苦しまないでくれよ。

「10-9-8-」

蘭・・・。

「結奈の勝ちね、蘭わん。」

「ま、まだ終つてない・・・。」

「まだ誰の？」

蘭のやつ・・・。

あいつ、負けず嫌いだから。

「蘭！頑張れ！」

「6！5！4！」

あと・・3秒

#21 「怪我」（後書き）

新一「ひさびさの登場だなあ。」

和葉「そやなあ。」

新一「なんでこの二人なんだ?」

和葉「そやそや。」

新一「作者の気まぐれとか?」

作者「ピンポーン　ｗｗ」

二人「気まぐれで出すなつ！」

作者「あはは＾＾；じゃあいつもので。」

三人「真実はいつも一つ！」

ここにちは、奈津美です。

裕也はもつと早く出す予定でしたが・・・まあいろいろとあります

＾＾；

続編の話も少し考えております。

最近評価が無いんですね・・・。

優しいあなた、評価を下さい！
ではでは、次話で会いましょう。

#22 「それぞれの思い」（前書き）

結奈つてなんなんだわい・・・。

#22 「それぞれの思い」

新一、今日夢で新一に会つたよ。

お花畠の中、私は寝てた。

新一が起きてくれた時は嬉しかつたよ。

私達、どこかで繋がつてゐんじゃなかつて。

結奈ちせんこ、新一は渡さない。

私、新一がいなくなつちやつたら・・・。

心が空っぽになつちやつ。

「3」

勝ちたい

「2」

負けたくない

「1」

新一は渡せない！

「ハアアアアアアア！」

蘭は立ち上がった。

「蘭！」

蘭は新一にピースサインを送った。

「な・・・なんで立ち上がれたの？」

「結奈ちゃんと同じだから。」

「えつ・・・？」

「新一が大好きだから。」

「つー知ってるわよー！」

バシッ

「えつ？」

ガツ

「見てれば分かる！」

バンッ

「新一さんが好きなんだって！」

バンッ

「あの二人、何言つてんのやね〜。」

「知らん。」

「さあな。」

バシッ

「ずっとずっと新一さんが好きだつたんでしょー。」

「結奈ちゃん・・・。」

ガツ

「結奈は・・・ふりつ子だよ。」

あら、自分で言つちやつた。

バンッ

「学校のみんなから嫌われてつー。」

ガシッ

「えつ・・・。」

「結奈に味方なんていないもんー。けど」の話しがはやめないー。」

「なんで?」

パンツ

「裕也がかわいにって言つてくれたから。」

ガツ

「結奈ちやんは裕也君が好きなんじゃないのー?」

バシッ

「好きだつたよ。。。

パシッ

「えつ?」

「ずっと好きだつたよーけど裕也も結奈が嫌いなのよー。」

「違つ! 嫌いなんかじやないー!」

「蘭さんに何が分かるのよー!」

「だって、嫌いな子の応援なんてしないでしょ?」

「あつ・・・。」

「裕也、ずっと応援してくれてた。」

「結奈ーー! 頑張れ!」

「けど、結奈が勝つたら新一さんとくつ付いちゃうのに。。」

「好きだから応援するの、好きな子だから応援するの。」

「裕也。。。

バシッ

「結奈ちゃん、新一は優しくよ。」

ガシツ

「。。。。。

パンツ

「けど、裕也君も優しい人なんじゃないの?」

「。。。。。

「。。。。。

「10年前」

『やーい!ふりっ子!』

『自分で自分の事名前で言つてるぜ!』

『お前なんかたいてやるー!』

『やだー！結奈痛いのやだー！』

『やめひよ。』

『裕也]ー。』

『結奈の話しか、かわいいじゃねーか。』

『裕也・・・。』

＼・＼・＼・＼・＼・

「つ・・。」

涙が溢れてきた。

たとえ嫌われていたとしても

ずっと好きでいるべきだった。

結奈は弱いもん。

そんなこと出来なかつた。

裕也、ありがとう。

あなたが応援してくれて

本当に嬉しかつた。

「 もう、いいよ。」

結奈ちゃんは両手をダランと下げた。

そして

バシッ

「 結奈ー。」

自分から蘭の蹴りに当たりにいった。

バタッ・・・。

結奈ちゃんは倒れた。

防具といつ仮面の下で

涙を流しながら・・・。

#22 「それぞれの思い」（後書き）

服部（やばいなあ・・・工藤達がくつこでしもつたら・・・）

和葉「なにしどん？平次。」

服部「なんでもあらへん！」

和葉「そんなん？」

服部（はあー・・・初恋の人言つべきやうか。）

和葉「じゃあいつものやつ行くか？」

二人「真実はいつも一つ！」

こんには、奈津美です。

結奈つて本当に分からぬ子ですよね。

新一が好きつて言つてたのに裕也が好きなんて・・。

けど、こういう子書いてみたかったので。

もう少しで完結かな？

ケビ、#30 で終らせるつてのもよくなのですか？

キリがいい（。・・）ひ（笑

#23 「緋奈の畠」（前書き）

ファンフィクションの「ワンキング」とか
どうやって見るのか分かりません^ ^ ;

#23 「結奈の皿田」

「ねーちひさんの勝ちー。」

服部が大きい声で言つた。

「やつたなあ、蘭ちゃん!」

「あつがとう、結奈ちゃんを保健室に運ばなくつもー。」

「平氣だよ、俺が運ぶ。」

裕也は結奈ちゃんをおぶつて保健室に向かつた。

「新一、約束守つてね。」

「後でな。」

「蘭ちゃん、ホンマよみかつたなあ。」

「つと、和葉ちゃんあつがとう。」

「蘭、足平氣か?」

「ねーちひんー!足腫れとるやんか。」

「平氣だよ、保健室でシップ貰つかうつ。」

「平気じゃねーだろ。」

新一は蘭をお姫様だっこした。

「ちよつと…恥ずかしいからおろしてよー!」

「バー口ー、歩かせる訳いかねーだろ。」

二人は保健室向かった。

「そろそろくつ付くなあ、平次約束覚えといてや。」

「あ・・当たり前やないか。」

やばいで・・初恋の人なんて言いとお無いんやけど。

平次と和葉は体育館で待っていた。

辺りはすっかり明るくなつていた。

（保健室）

「つ・・・裕也?」

「結奈、平氣か・」

「大丈夫だよお。」

「俺、結奈のこと・・・。」

「裕也、私ね裕也に言いたいことがあるの。」

「えつ？」

「・・・・・・

「ねえ、結奈ちゃん達の邪魔しちゃ悪いんじゃない?」

「それもやーだな。」

「ソリで座つてよ!」

一人は保健室前で座つていた。

「・・・・・・

「結奈・・・裕也のことが好き。」

「はつー!?

「・・・・・。」

結奈の頬は赤く染まつた。

「お前は新一さんが好きなんじゃねーのかよ。」

「裕也がずっと好きだったのー。」

「うやつけーいつもいつも新一さんのことばっか話しゃがつて!」

「そ・・・それは。」

裕也をあきらめようって思ったからだよ。。。

新一さんなら私を受け入れてくれるって思つたからだよ……

他の男の話には、かじてんしゃねによ!

卷之七

備考

• • •

一
し
感
じ
た
な
」

「へんそNINJヤなし？」

• • • •

俺たって……絹奈のこと好きだったんだよ！」

一
え
・
・
・
?

「お前に新一ちゃんのことか？」

「おもてなし」

ポロツ

「お前……何泣いてんだよ。」

「だつて……ずっと裕也は私のこと嫌ってるんだつて。」

「お、おごー。」

「裕也との恋は叶わなーって思つたのー！」

「結奈……」

「それなら、裕也を忘れようつて思つたのー！」

「……」

「けど、裕也が応援してくれた時……嬉しかったの。」

「えつ。」

「嬉しくて……たまんなくつて。」

「つたぐ……相変わらず世話のかかる奴だな。」

ポンポンと結奈の頭を裕也は叩いた。

そして小さな声で言つた。

「もう他の奴好きになんじゃねーぞ。」

結奈は耳まで真っ赤にして

「・・・うん。」

涙をこぼしながら笑顔で言った。

「ナビ君、お前・・新一さんのこと。」

「好きだったかもねつ。」

「マ・・・マジ?」

「やだあ～焼きもちっ。」

「ば・・・ばか。」

「けどさ、あの優しい所は好きだったなあ。」

「・・・分かるかも知れない。」

「えつ?」

「あの人・・・優しいしな。」

「見習つてよ。」

「うみせえ。」

ガラッ

「シップ下さい。」

「新一さん！」

結奈と裕也は声を揃えた。

「おめでと。」

俺は一言もさう言って、裕也の頭をくしゃくしゃにしていた。

そして保健室を後にした。

蘭にシップを貼つた後、体育館に行つた。

俺達は服部達と家に帰つた。

今夜はパーティーだ！

#23 「結奈の告白」（後書き）

前書きの通り、ランキングとか知ってる人。
私にメッセー^ジ下さい。

けど、今パソコンおかしくて返信はできませんが^{へへ}；
誰か、教えてください^{へへ}；
後、評価もお願いします。

奈津美

#24 「流れ星に願いを～約束～」（前書き）

タイトル微妙だあ・・・。

#24 「流れ星に願いを～約束～」

「かんぱーこー。」

工藤家にこだまする明るい声。

「蘭、おめでとう。」

そう、これは蘭の決闘勝利おめでとうパーティーだ。

俺と蘭、服部と和葉ひやんに博士と宮野と園子に少年探偵団だ。

「『ナン・・・・・』じゃなくて新一兄ちやん、うな重ねーのかよ。」

「元太、相変わらず食べ物の事ばつか考へてんなあ。」

「いいじゃねーかよ。」

「ナン。」

この前前、もうどれくらい聞いてなかつたか。

懐かしいなあ・・・。

俺、あいつらと一緒にいたんだよなあ。

「新一さん、料理すつじくおこしこよつー。」

「あつがとう美ちゃん。」

「うーん…塩加減が甘いと思いますよ。」

光彦、お前本当に小学生か？

「新一君、カラオケセツト持ってきたわよ。」

「サンキュー、元太達歌うか？」

「もちろん！」

曲はもうひとつ…。

（　）

「仮面ヤイバーかめーんヤイバー！」

のりのりだなあ…。

「楽しいよ、新一。」

「そうか？ならよかつた。」

「新一も歌つたら？」

「ば、ばーるー！俺がオンチだつて知ってるくせに。」

「園子、なんか入れといてー。」

「あいよつ。」

おこむー・・・俺はいいけビ。

みんながどうだか・・・。

知らねーぞ。

「あ～」おお～ぐあ～れぐあ～ぐえあい～い～かあ～わうつたひ～。

「

「ウギヤアアアアア。」

悲鳴も工藤家にこだました。

新一には改心の出来だったりしが。

みんなにはもう思えなかつた。

「新一、約束・・守つてよ。」

「・・・・・。」

やべえー!!の立葉考えてねー!

「ああ、じゃあ後で一階に来てくれ。」

「うん。」

だあああーーー、じつすれぱーこんだあーーー。

「新一君、悩み事?」

「ま、まあな。」

「まっせーん、プロポーズの言葉でも考へてるの?」

「ブッ...」

俺は飲んでたジュースを吹き出した。

「そんなの簡単よ、もつお前を離れないってのは決つかじらへ。」

「おこおい・・・。

「いいよ、自分で考えるから。」

「え?」

「――藤君、サンディッシュが無くなつてゐるけど?」

「ザツ・・・・富野。」

「サンディッシュ作ってくれたら嬉しいわ。」

「へいへい。」

「新一も大変じゃなあ。」

「博士も手伝えよ・・・。」

俺はサンドイッチを作つてからまた歌つた。

みんなはもう歌うなつていうけど、俺は結構いけてたと思う。

「歌は俺の勝ちや」って言われた。

9：00にはみんな帰った。

「工藤、頑張りや。」

脛部と和葉ちゃんに押されて俺は一階に向かうた。

「新一、見て見て！きれいな星空！」

ああ・・・「

「じゃあ早速約束を守ってもらおうかな?」

服部達は隣の部屋で聞き耳を立てている。

「分かつた、俺の好きな奴を教えればいいんだろ。」

「うん。」

תְּהִלָּה בְּשֶׁבֶת וְבַשְׁבָתָה

(やべー・・・心臓バクバクだぜ。)

}, . }, . }, . }, . }, . }, . }, . }, . }, . }, . }

「早く言えや、工藤！」

「人のこと言えないやろ。」

「なんや、和葉。」

「本当のことやないか。」

「……」

「俺の好きな人は……。」

「あ、あのさあ。好きな人の特徴を教えてよ。」

(ーー)

「……優しくて、意地つ張りでみょーちくりんで。」

「みょーちくりん？」

「ガキの頃から泣き虫な所があつて、今は空手やつてる。」

「えつ……。」

「小さい頃からずっと好きだつたんだ。」

「それ、どうして私に当てはまつてるの……？」

「好きだからだよ。」

「え？」

「お前の」Jとが世界でいちばん好きだからだよ。」

גָּדוֹלָה

「お前は誰にも渡さない。」

ポロッポロッ

— · · · —

「まじめなこと」

新

ギュ
ツ

俺は蘭を抱きしめた。

「私も新一が好きだよ。・・・。」「

一
そ
づ
か
」

• { • { • { • {

「ハッピーハンドやな。」

「ああ。」

「まだキスせえへんの?」

「あの二人はまだとちやうか?」

「後でのストラップの」と言わなあかんな。」

「そやな。

{ . } . }

「ねえ、新一。」

「なんだ？」

「今日、夢で新一に会ったの。」

(えつ・・・?)

俺は確信した。

二人は同じ夢を見たんだつて。

「俺も。」

「えつ？」

「俺も蘭に会つたよ。」

俺達はどこかでつながってるんじゃないかな。

もつまつと前から。

それは服部たちも同じだと思つ。

「好きだよ、新一。」

「・・・ばーひー。」

その後、蘭は家に帰つた。

服部と和葉ちゃんにいろいろ聞かれた。

疲れた・・・。

けど、俺は蘭に告白したんだよな。

蘭も俺が好きなんだよな。

両思い・・・。

俺は顔を真っ赤にしたまま寝室に向かつた

その時

流れ星が流れた。

蘭と一緒にいられるよう

俺は願い事をした。

#24 「流れ星に願いを～約束～」（後書き）

こんにちは、奈津美です。

ファンフィクションランキングは・・・36位でした。

あつ、評価よろしくお願いしますww

ではでは、次話で会いましょう＼(・皿・)／

#25 「あかん」（前書き）

タイトルでだいだい登場人物分かりますよね^_^

#25 「あかん」

くつ付いてしもうた・・・。

工藤とねーちゃんがくつ付いてしもうた。

あかん・・・。

和葉に初恋の人教えなあかんやん！

恥ずかしいやないか！

トントン

誰かが俺の部屋をノックした。

俺の部屋つて言つても工藤の家やけどな。

「ビーゾ。」

ガチャ

「平次・・・。」

「か、和葉！」

「あかん・・・約束の」ととけやつ・・・？

「あんなあ、怖い夢見たんや・・・一緒に寝てもいいかな？」

「ええー。」

和葉と一緒に寝るやつおおー。

あかんー。

「お願いや・・・。」

和葉が半泣きだったから

俺はしゃーないからベットに寝かせた。

「平次の隣は安心や・・・。」

そつこつて和葉は寝てしまつた。

「寝れへん・・・。」

俺はなぜか眠れんかった。

なんか・・・ドキドキしたんや。

和葉やのん。

子分やのん。

じつ

「スースー」

俺の背中に和葉の寝息！

あかん、心臓がバクバクいりとるー！

「・・・・・アホ。」

俺は和葉の頭をなでてから

寝よっとした・・・。

ナビ、やつぱり心臓の音がひるむとて眠れへんね。せ

俺は、和葉が好きなんやうか・・・。

分からへん。

俺はアホや・・・。

ラブラブストラップ・・・一個いつでもつた。

一つは工藤ので、もう一つは分からへん。

ただ、気につけたらいいんだよ。

俺と和葉は幼なじみや。

そやかで、それだけでもない気とする。

分からへん。

「ん・・・。」

けど、今はこれでいい。

和葉の寝顔がかわいいから

今田はもう寝よか。

俺は和葉の頭をなでた後

なんとか寝れたんや。

チュンチュン

小鳥の鳴き声が聞こえる・・・。

今、何時やろ・・・。

「ん・・・。」

「へ、平次・・・。」

「和葉・・?」

「・・・近いんやけど。」

気いついたら俺は・・・。

和葉を抱きしめてた。

「な・・・なんでやああああーー！」

「「」うちが知りたいわ！」

なんや・・・俺だけか？

ドキドキしてたんわ。

「あんなあ、平次が近くにいたから息苦しかったんやから。」

「へつ？」

「心臓バクバクやつたんよ・・・。」

和葉も・・・ドキドキ？

そつか、ならええわ。

俺は下に下りて朝食を食べた。

なんか和葉を意識してもつた。

あかん・・・。

「飯が喉を通らん。

「あかん。」

「ん? ビリした服部。」

「なんでもあらへん。」

昨日と今朝の二日は一人の秘密や。

なつ・・・和葉。

和葉と田代が合つた時、吹き出しちもつた。

「なんだよ、あつたねー。」

工藤の言葉なんか耳に入らへん。

「今日で東京とお別れか。」

「そやな、ちよつと寂しごわあ。」

俺達は、和葉と一緒に朝食後に帰る仕度をした。

そして、工藤家を後にしたんや。

今度は、工藤たちが大阪に来る番やな。

おつむさん誘わなあかんし。

じゃあな、工藤。

じゃあな、ねーちゃん。

あつ、つこでにあのあつつけーちゃんとおでんばねーちゃんと

博士といひつぱりせんむじゅあはな。

じゅあな、東京。

「平次、はよ行くで。」

「おお、今行く。」

俺は和葉と新幹線に乗った。

電車の中ではまくらとまくらで、あたたかかった。

楽しかったで。

#25 「あかん」(後書き)

「こんにちは、奈津美です。
なんだか最近忙しいです。
文字数は減らさぬよう、頑張りますよ。
優しいあなた、評価を下さい。
みんながこの作品をどう思つてると気になるんで^ ^
ではでは^ ^

#26 「毛利蘭」（前書き）

蘭の思いが分かりますよ。

#26 「毛利蘭」

私、新一と面思いなんだよね・・・。

私、新一の彼女になれたんだよね・・・。

嬉しい・・・。

チャラチャラチャヤチャチャチャチャ

「あつ、メールだ。」

和葉ちゃんからだあ。

なになに・・・・

『工藤君とくつ付いてよかつたなあ。』

私は恥ずかしくて顔が赤くなつた。

『ありがとう。』

私はそう返信した。

そういうば・・・・。

さつき、元太君が言つてた。

”「ナン」”

私も久しぶりに「コナン」という名を聞いた。

「コナン君。

あれは新一だったの?」

けど、なんか。

探偵事務所が寂しい。

コナン君がいなくなっちゃったから。

私には

コナン君も新一も必要だつたんだ。

けど、それは無理。

贅沢かな?

新一がいるのにね。

チャラチャラチャラチャラチャラチャラ

「あつ、和葉ちゃんからだ。」

えつと・・・!?

『新一君の告白よかつたなあ』。

なんで・・・。

なんで・・・和葉ちゃんが?

知ってるのー!

『なんで知ってるの?』

私は返信した。

コナン君に会いたいなあ・・・。

つて、そんなこと無理よね。

ありえないありえない。

けど、志保さんなら。

志保さんならできるかもしねない。

あの、志保さんを殺そつとしてた組織を

コナン君がつぶした後、新一に戻れたのは・・・。

志保さんの薬のおかげだし・・・。

もしかして・・・?

けど、新一は

「コナンになりたくないよね。

ばかだなあ。

新一と同じくらい

コナン君が好きだったんだ。

存在しない少年なのに・・・。

チャラチャラチャチャチャチャ

「えつと・・・!?

『実は・・・隣の部屋で盗み聞きしてたんや。』

「盗み聞きー?」

じゃあ・・・あの会話全部聞かれりやった!?

恥ずかし~~~~~!?

あれ? 文章に続きがある。

『園子ちゃんにも教えちゃった。』めんな蘭ちゃん。

園子に!?

・・・絶対冷やかされるじゃない。

わ、和葉ちゃんだ。

くすり

「アハハ。」

蘭は一人で笑ってしまった。

盗み聞きしてた二人を想像したのだ。

「変なの・・・。」

とつあえず、明日・・・。

志保さんに聞いてみよ。

無理なら諦める。

私、まだコナン君に

『行つてらっしゃい。』

つて言つてない。

『さよなら。』

とも言つてない。

それだけ言えればいいの。

なんか、すりきりしない。

お父ちゃんもやう。

「ナン君が困くなつたら

「寂しげな。」

そう言つてぱつかり。

そんなこといつないおぬしと云つて呪せまつた。

恭美ちゃんたちもやう。

「ナン君にはもう会えないんだね。」

「なんだよ、ナン……。」

「お別れぐらこしたらここだ。」

みんな泣きながらさうひこつたもの。

「ナン君は

いなきやいけなかつた。

けど、

それは無理。

「ふうー。」

ため息。

なんか、疲れちゃった。

「おやすみ。」

だれもいない部屋に言った。

『おやすみ、蘭ねえちゃん。』

この声が前は聞けたのにね。

寂しい・・・。

「ばかだなあ、新一がいるの。」

そう言って私は寝た。

私の頭の中が、じめじめになっていく。

嬉しい。

悲しい。

寂しい。

本当に元気ひひひしゃで

疲れてしまった。

けど、明日

新一の顔見たら。

こんな気持ち吹っ飛ぶよね。

#26 「毛利蘭」（後書き）

こんにちは。

これからはみんなの心情を書きたいと思います。
おもしろいところはないけど

読んでくださいねー^-^

評価やアドバイスをどうぞよろしく〜(^-^)v

#27 「志保への願い」（前書き）

蘭がどうとう行動に起きました。
口ナンは前から出したかったので^ ^

#27 「志保への願い」

翌朝・・・。

私は、博士の家に向かつた。

志保さんにお願ひするためだ。

ピンポーン

「・・・・・。」

ガチャ

「あら、蘭さん。どういたの？」

「あのね、志保さんにお願ひがあつて來たの。」

「まあ、とにかくあがつて。」

私は、博士の家に入った。

力チャ

「はい、コーヒー。」

「ありがと。」

私はソファーに腰掛けた。

「あのね、新一を小さくするのって無理かな？」

「それ、本気で言つてるの？」

志保さんは真剣な顔つきで私に聞いかけた。

「うふ。」

「どうして？」

「『ナラン君にいいことがあるの。』

志保さんは驚いた。「

「……。」

よつほど危険なんだろ？

よく分からぬにナビ。

志保さんの表情は決して明るくなかった。

「……分かったわ。」

「えつ？」

「薬を作つてみる。」

「あつがとう……。」

「ナン君に会えるんだ。

「ただし、JのJとは工藤君には内緒ね。」

「・・・うん、分かつた。」

内緒にする意味が分からぬけど。

「ナン君に会えるならそれでいい。

「・・・後ね。」

「なに?」

「私の話、聞いてくれるかしら?」

「うん。」

志保さんの話なんて聞いたことなかつたもの。

「私の母はイギリス人のハーフだったわ。」

「へえ・・・。」

どうで外国人のような顔立ちをしてると思った。

「父と母は私の小さい頃に亡くなつたわ。」

志保さんは、つらい思いをしてきたんだね。

だから、自分を出そうとしないのかな。

「姉は、あなた達にあつてこるのよ。」

「えつと、あの広田さん。」

「畠野明美、私のたつた一人の肉親。」

そう、あのジンとかいう男に拳銃で撃たれてしまった。

私の目の前で。

「私を救ってくれたのは江戸川君よ。」

「コナン君が?」

「ええ、どんな時も私をかばってくれたわ。」

やつぱり。

コナン君の存在は

必要だつたんだよ。

志保さんにも。

「正直言つて、江戸川君を元に戻すか悩んだわ。」

「えつ?」

「江戸川君はいなきやいけなかつたのよ。」

「志保さん……。」

「けど、あなたのためよ。」

「えつ?」

「あなたがいたから、彼を戻した。」

「志保さん……。」

私は博士の家を後にした。

志保さんは三日後に薬をくれると喜ってくれた。

私は、新一の家に行つた。

「新一、おはよ。」

「ひ、蘭!」

「……あのね。」

「なんだ?」

「ことじま工藤君には内緒ね。」

「な、なんでもない。」

「変なやつ。」

私は新一に抱きついた。

自分でもなんで「よな」としたかは分からぬ。

ただ、なんかすつきりした。

心が綺麗になつたつて感じ。

「え、ぱーん。」

「・・・ふふふ。」

なんか新一がかわいく見えた。

まるで・・・「ナン君みたい。

あつ・・・。

「ナン君の」と、あれよといふと思つたのに。

志保さんに頼んじやつたし。

私・・・自分勝手かなあ?

#27 「志保への願い」（後書き）

新一「おっ、随分久しづびりだつたなあ。」

志保「そうね。」

新一「なんでお前なんだよ・・・。」

志保「あら？ 蘭さんがよかつたのかしら？」

新一「つ！！」

志保「あら？ 頬が真っ赤ねえ。熱でもあるの？」

新一「み～や～の～！～！」

作者「次回、小五郎登場です。」

新一「じゃあいつもの決め台詞ー！」

三人「真実はいつも一つ！」

こんにちは、奈津美です　ｗｗ

次回は小五郎の思いです。

#35 で終らせたいので、時間稼ぎです（笑

いつも思いつきで書いていて

ここまで来るのは思いませんでした。

みなさん、評価ありがとうございます。

そして、これからも評価のほどをよろしくお願いします。

ファンフィクションのランキングは32位になりました。

みなさんのおかげです　▽▽▽▽

ではでは、さよならへへ

#28 「名探偵毛利小五郎」（前書き）

小五郎の思いを書きたかったので書きました。

#28 「名探偵毛利小五郎」

俺の名前は毛利小五郎。

あの有名な名探偵だ。

まあ、前はコナンが解決してくれてたんだけどな。

コナン。

最初は生意氣な小僧だと思つた。

ただの居候だと思つた。

しかし、急に居なくなつてしまつと・・・。

寂しかつたんだ。

俺が、あんな小僧に助けてもらつてたなんて認めたくないがな。

けど、あいつのおかげで有名になれて。

いい夢見れたよ。

あの後、俺は頑張ったんだぞ。

事件に関する知識を

本で頑張って調べた。

今まで見落としてた証拠も

見つけられたのみになつた。

あいつのおかげで

俺は、こつもより胸を張つて

「名探偵の毛利小五郎です。」

つて言ふよくなつた。

力チャ

「毛利さん、コービーです。」

「おお、梓ちゃん。悪いね。」

「どうしたんですか?ボーッとして。」

「いや、さうと考え事をね。」

「そうですか、今日の仕事は何件ですか?」

「えーと・・・五件だな。」

「じゃあ、大忙ですね。さすが名探偵。」

そう、今日も俺は名探偵。

毎日毎日忙しいけど。

結構楽しいんだなあ、こいつや。

事件解決後のビールもつまいしな。

「うれしいやん。」

「じゃあ、頑張って下さーいね。」

「ああ、じゃあな梓ちゃん。」

俺はポアロから出た。

外の空気を吸つてから、探偵事務所に入った。

季節は七月。

夏休みの前半だな。

コナンがいなくなつてからは、いろいろと変わってしまった。

蘭はあんまり事件にこなくなつた。

コナンと一緒にいろいろなところにいったな。

あいつ、ひょっこり現れねえかな。

つて言つても・・・今は探偵ボウズだもんな。

ありえないことだ。

ただ、あいつの頬をつなつてやりたい

あいつを投げ飛ばしてやりたい。

ただ・・・それだけなのに。

ガチャ

「あのー・・・わざ電話した者ですが。」

「「ハニカム、ビハコハ」用件でしょ?」

「実は・・・命を狙われているんです。」

「「」の名探偵毛利小五郎があなたを守つてしまおげましまへ。」

今日の日差しは暑くて

眩しかった。

#28 「名探偵毛利小五郎」（後書き）

志保「次回は結奈さんの思いね。」

平次「・・・そやなあ。」

志保「あなたつて、私のこと嫌いなのね。」

平次「嫌いつちゅーより苦手やな。」

志保「あなたには和葉さんがいるしね。」

平次「～～～～！」

志保「あら、あなたかわいい」ところもあるのね。」

平次「誰か助けてやあああ！」

作者「じゃあ・・・いつも決め台詞。」

三人「真実はいつも一つ！」

ここにちは、奈津美です。

明後日辺りに「ライバルは中学生！？」は完結です。
ストックがたくさんあるのでへへ

続編も頑張りたいしww

続編も評価もよろしくお願ひしますww

今回の話は短めですね。

次回も短いですがww

最初はここまで続くと思いました。

ちょっと長いですが、みなさんに読んでいただけないと
嬉しいですww

他の作品も読んでくれると嬉しいですww
ではではへへ

#29 「鈴木園子」（前書き）

園子は好きです　ｗｗ
なんか気取つてないところが　＾＾
今日は短いのですぐに読み終わるかと　ｗｗ

#29 「鈴木園」

辺つは闇のよつて歸く。

明かりなんてほんとんど無かつた。

・・・・・・・・・・・・

やつとくつ付いたのねー。

あの一人の「ホールインは長かつたわあ。

私も見ててじれつたかったもの。

それにして工藤君もやるわねえ。

『お前のことが世界で一番好きなんだよ。』

なんて・・・・。

真さんに言われてみたいわあ。

真さんに・・・・会いたいなあ。

蘭は強かつたなあ。

新一君は帰つてくるまでずっとずっと耐えたじゃない。

私にはできないなあ。

プルルルルルル

あら？電話じやない。

「はい、園子でーす。」

『園子さん、アジアカップ優勝しました！』

「真さん・・・・?」

『はい、真です。』

「バカ！試合くらい教えてよー。」

『負けるトコ見られたくないので。』

真さんのバカ・・・。

あなたが負けるわけないじやない。

本当にバカ。

『それと園子さん、暑いからとつてお腹を出さないでください。』

・・・・今、出してるけど。

「もちろん、分かってるわよ。」

『では、また。』

「真さん！！」

『なんですか？』

「優勝、おめでとう。」

『ありがとうございます。』

ブシッ

ツーツー

「・・・むへ、真さんつたひ。」

私も強くならなつくなつや。

今ままじやだめね。

真さんが日本に帰つてきたら

笑顔で言わなくちゃね。

『おかえりなさい』

つてね。

そつそつ、時々メガネのがきんぢょが夢に出てくるのよねー。

また、あの顔見たいわあー。

頬をつねつてやりたい。

あーあー今日はなんにもすることないやあー。

「フア～ア」

眠い・・・。

もう夜の11時じゃない。

そろそろ寝ますか。

夢に真さんが出でくるかも～。

夢で会えたら園子幸せ～！

#29 「鈴木園子」（後書き）

こんには、奈津美です。

早く投稿したくてしてしまいましたww

続編を早く書きたいといつのもあります
なるべく早く完結させたい気分です^ ^

#1に比べたら少しは文章が上手くなったかな?
最初はひどかつたあー^ ^ ;

#35で終ります。

エピローグは書きません^ ^
だって、続編あるし(。・。)b

次回は結奈の話ですww

結奈の気持ちを分かつてあげて下さい。

ではでは、次回会いましょうww

#30 「結奈の思い」（前書き）

#35 で完結なのでもう少しです。
頑張りますので、最後まで読んでください。

「みんなさい。

あなたのこと好きだったのは

本當たがら

信
じ
て
ね

まだ田が出ていない。

新編　江戸の文化

辺りはまだ暗かった。

保健室で

裕せは言つてくれたの

前註解が守られてゐるか安心してNを購入

その言葉、信じるよ。

恋つて不思議だよね。

急に好きになつてたりするもん。

結奈、あいつと……。

本気だつたんだ。

新一ちゃんのこと

本気で好きだつたんだ。

「…………最悪。」

「んな」と声えちゃうなんて……。

結奈には裕也がいて

蘭さんには新一さん。

平次さんは……和葉さん……（だつけ？）がいる。

恋は、いつのまにかしてるもので。

必ず、叶うとは限らない。

新一ちゃんに……謝りたい。

キスのこと

蘭さんを傷つけたことと

あなたを振り回したこと。

皿口母で「あなたがい。

・・・・ もう朝だ。

私は朝の道を散歩した。

目が覚めていてもう眠れない。

歩こてればすつきつすると思つた。

・・・・ 蘭さん。

結奈にとつて

前も

今も

ライバルだからね。

前は新一さんを巡つて。

そして

今は、蘭さんよりもいい恋愛するつて決めたの。

蘭さんのライバルは

中学生なんだから。

あなたよつひよつと若こんだからねー！

「・・・結奈？」

後ろから

私を呼ぶ優しい声がした。

「・・・裕也？」

「お前、じつじつこんな朝早く起るんだよ。」

「裕也！」

「俺は、ランニングしてるんだー！」

裕やは帝丹中学のテニス部エースで

みんなから期待されてる。

一度だけ、期待がフレッシュヤーとなつ

試合に負けたことがあった。

けど、まさか

こんな朝早くから練習してるなんて

思いもしなかった。

「・・・裕也は期待されるよね。」

「なんだよ、いきなり。」

「怖くないの?」

「なにが?」

「みんなに期待されて、もし・・・失敗しちゃつたら。」

「結奈・・・。」

みんなが私から離れた理由は他にもある。

そう、あれは

小4の頃・・・。

私は、学校の音楽祭で

ピアノを失敗してしまった。

結奈のクラスは優秀賞が取れず、準優秀賞で終った。

その時

みんなにひどいことたくさん言われた。

『なんで、失敗したの?』

『お前がこのクラスにいなきやよかつた。』

『・・・結奈にはがっかりだよ。』

次の日

私の周りに

友だちと呼べる存在が消えた。

もう寂しくてビックりもない時

裕也だけが結奈の味方だったね。

「まだ、あの時のこと・・・？」

「時々・・・夢に出てくる。」

私は、そのことがトラウマとなり

ピアノが弾けなくなつた。

泣いた。

泣いた。

泣きじやくつた。

大好きなピアノが弾けなくなつた・・・。

それは私にとって

一番つらい

それをなげさめてくれる友だちもいない。

「なあ、結奈。」

「な……なに?」

「決心がついたらでいいからね。」

「……うん。」

「俺のためにピアノを弾いて欲しい。」

「……えつ?」

「また、あの音が聴きたい。」

「裕也……。」

「結奈の音を聴きたい。」

「ユイナノオト……?」

「……うん。」

「やつこえば、新一ちゃんにお礼してねーや。」

「結奈、ここ」と想いついた。」

「シラシラ

「ああ、それはいい。」

「でしょおー結奈、早速練習するね。」

私は家に帰った。

そして、ピアノの前に座った。

新一ちゃんへの思いや

寂しい思いや

蘭さんへの思い

みんなへの思いを

ピアノの鍵盤にぶつかった。

／＼＼＼＼

今、この時

一番幸せ。

ピアノが奏でる

「この心地よさメロディ

ずっと、このメロディを弾いてたい。

新一 わん・・・・。

結奈、もう平気だよ。

パパはいつか帰つてくるって信じてるから。

だから、蘭ちゃんを幸せにしてあげてね。

結奈は「この想いを

ピアノに託す。

そして何時間も弾き続けた。

時がたつのを忘れて。

ママはソファーで

結奈の曲を

泣きながら聞いてくれてた。

ママの涙を見たら。

結奈も涙が出てきた。

失恋、寂しさ、失った物

この涙が全部洗い流してくれた・・・。

#30 「結奈の思い」（後書き）

新一「なんかさあ、宮野が何か作ってるらしいんだ。」

平次「お前をまたつっこくする薬でも作ってるんとちやうへん？」

新一「・・・・・。」

二人（ありえる…）

作者「次回はどういう展開になるでしょうかねえ。」

新一「クライマックスだからなあ。」

平次「ほな、いつものやつこくで…。」

三人「真実はいつも一つ！」

ここにちは、奈津美です　ww

実はもう最終話が書きあがっています。

明日完結させるか、明後日完結させるか・・・。

みなさん、評価と一緒に、明日がいいか明後日がいいか決めて下さ

いへへ

ではでは、次回会いましょうww

#31 「明日」

明日

私は薬をもらひ。

志保さんは薬を作り上げたのかは分からぬ。

けど、志保さんなら完成できるよ。

みんなも喜ぶよ。

歩美ちゃん

元太くん

光彦くん

お父さん

志保さん

園子・・・?

みんな、みんな

コナンくんを待つてゐる。

私は・・・自分勝手かもしけないけど

「ナンくんと

少しでいいから話したい。

いろいろなことで話したい。

少年探偵団のみんなはナンくんとカッカーしたって言っていた。

お父さんはナンくんを投げ飛ばしたいって言っていた。

志保さんを支えたのはナンくん。

園子は・・・分からない。

早く・・・明日にならないかなあ。

嬉しくて眠れないよ。

「蘭、どうしたんだ?」

「お父さん。」

「ほーっとしてるか? お父さん

「楽しみなんだあ・・・。」

「ああ。」

「お父さん、ナンくんを庇つてやるの?」

「・・・生意氣な小僧。」

「 もう一。」

お父さんって・・・素直じゃないのよ。

お母さんに対しても・・・。

「よしー明日を祝つて飲みまくべーーー。」

お調子ものなんだから。

「特別ね。」

お父さんは缶ビール10本飲んだ。

テレビの前で酔いつぶれてた。

「」・○・▽・エーラブライアン

「お父さんー飲みすぎよー。」

「蘭ちゃんわーん・・・もつと買つてしまふ。」

「お父さんー。」

「ぬあーんじゅええすぐあーー。」

「ここ加減にしてよー。」

バシッ

私はつこお父さん回し蹴りをしてしまった。

「ふあ～こむ～え～。」

バタンシ

「お父さん～大丈夫～～！」

お父さんは氣絶してしまった。

私は、酔い覚ましのトマトジュースを買いに行つた。

「わ～・・・お父さんつた～。」

トマトジュースは自動販売機に売つてないから

私はコンビニまで行つた。

＼＼＼＼＼

「あれ？」

もう夜遅いのに

ピアノの音色が耳に入ってきた。

とても素敵な音で

私は音を頼りに

どこから聞こえるのか探した。

「うるさい」

ピアノの音は佐々岡さんといつ家から聴こえてきた。

ガラツ

上で窓を開ける音がした。

上を見上げると

一
・
・
・
簾さん

結奈ちゃんがいた

蘭さん……嫁に上かりませんか？」

・ 結奈ちゃん・・・じゃあ、遠慮なく

結奈ちゃんの家はとても大きくて

中も広々していた。

「蘭さん」

「あつ、裕也くん。」

「今ね、ピアノの練習したの。」

「どうして？」

「新一さんに謝りたいの。」

「え？」

「謝つてから、このピアノを聴いてもらひや。」

結奈ちゃんは田のトにくまを作っていた。

「このピアノの鍵盤にこんな思いをこめて弾くの。」

結奈ちゃんは

前より大人になつた気がした。

裕也くんも

前より男っぽくなつた。

恋は人を変えるんだつて

そう思つた・・・。

／＼＼＼＼

結奈ちゃんのピアノの音は

明るいけど

寂しさも感じられた。

涙が出た。・・・。

「結奈ちゃん・・・。」

「なんですか?」

「明日、新一の家でピアノ演奏してよ。」

「えつ・・・・?」

「明日は・・・記念日になるから。」

「・・・は、はあ。」

結奈ちゃんに、明日はコナンに戻る日だつて言つたら

驚いてた。

「ナンくんの」とは、新聞で見たことがあるらしい。

新一とコナンくんが同一人物だつて聞いて

驚かない人なんていないしね。

その後、もう一回ピアノを聴いて

私は結奈ちゃん家を後にした。

もう少しひん、トマトジュースは買つた。

お父さんに飲ませなくちゃ。

〜 〜 〜

また聴こねるピアノ。

Jの曲を

「ナムくんに聞いて欲しいって思った。

今田の姫は

なんだか寂しい色をしていた。

#31 「明日」（後書き）

「ここにちはあ・・・奈津美です。

優しいあなた、評価を下さい。

明日が明後日でこの話が終ります。
アドバイス下さい。

続編に出して欲しいキャラなども評価と一緒に
お願いします。

気分が の作者です・・・。

新一「元気だせよ。」

蘭 「けど・・かわいそう。評価がいくつか消えてたなんて。」

新一「今日はいつものやめるか。」

蘭 「じゃあ、代わりのやつ！」

二人「作者に評価を！」

#32 「小説なつた名探偵」（前書き）

といひついですよー。
といひつい新一が・・・・ー?

#32 「小さくなつた名探偵」

翌朝

私は志保さんの家に行つた。

薬を受け取るために・・・。

ピンポン

コナンくんに会えると思ひと

嬉しくてじつとじてられなかつた。

ガチャ

「あら、朝早いのね。」

「『』めんなさい。」

よく考えたらまだ7・8時だつた。

「いいのよ、さあ上がり。」

私は博士の家に入った。

博士はまだ寝てるといつ。

いびきが家に響く。

「これが、幼児化クッキー。チヨ「チップ入りよ。」

「クッキー？」

「だつて、薬の原型のまま工藤くんに渡しても飲んでくれるか分からないわよ。」

「そつかあ・・・。」

さすが志保さん・・・。

「あなたの手作りだつて言つたら喜んで食べれるわよ。」

「そうかなあ・・・。」

「そうよ、わあ行きなさい。彼の元へ。」

「ありがとう、志保さん。」

「これは私からのプレゼント。」

志保は蘭に箱を渡した。

きれいなラッピングがしてある。

「いいの?」

「ええ、今開けて見なさい。」

私はきれいにラッピングを取った。

つばを飲み込んでから

私は箱を開けた。

「えつ…ビ…・・・ドレス?」

志保のプレゼントは

純白のドレスだった。

「今日、パーティでもするんじゃないの?」

「えつ?」

「だつて、江戸川君に戻るのよ。」

「…・・・するよ。」

結奈ちゃんにピアノを頼んだし。

ケーキも作るつもりだし。

「パーティって飽きないわね。」

「志保さん…・・・。」

「私も参加していいかしら?」

「おひるね……」

「じゃあ、行かなせー。」

「うそー。」

私は新一の家に行つた。

この薬のタイムコリジョンは24時間。

「田の畠は「ナンバーンなんだ。」

ピンポンピンポン

ガチャ

「蘭……どうしたんだ?」こんな朝早く。

「これ……クッキー。手作りなの。」

新一は照れくわいひに頭をかいて

「サンキュー。」

一皿皿つてから食べてくれた。

「うそ、おこし。」

「本物?」

「ああ・・・。」

ドクン

「ぐう！」

「新一！」

薬は効いているらしく、新一は汗をかいている。

私は新一をベットで寝かせた。

ドクンドクンドクンドクン

(俺……どうじちまつたんだ?)

ドクン

— ८ —

ドクン

新一！

こんなに苦しそうな新一・・・久しぶりに見た。

新一は気を失つてしまつた。

「…………？」

「…………？」

そうだ、蘭のクッキーを食べたんだ。

俺……どうしちまつたんだ？

「…………」

俺は不自然さを感じた。

「あれ……？俺、こんなに小さかつたっけ？」

俺はベットから降りた。

手が楽に届くはずのドアノブを取るのが精一杯。

俺はとりあえず下に降りた。

「蘭？おい？」

蘭の姿は無かつた……。

俺は髪を整えようつと思い、等身大の鏡を見た。

等身大の鏡がでかくなつたのだろうか。

自分が小さくなつたみたいだ……！

俺は田をパチクリさせた。

「体が・・・縮んでるーー。」

パンツパンツ

クラッカーの音。

自分の頭に紙テープが乗る。

「コナン君、お久しぶり！」

みんなが一斉に隣の部屋から出てきた。

蘭とねつわちゃんと少年探偵団と博士と面黒と服部と和葉ちゃんと

園子と結奈ちゃんと裕也ちゃんと父ちゃん

「なんで・・・・父ちゃんがいるんだよ。」

「ふふひ、新ちゃんがコナンちゃんになぬか聞いたのよ。」

「！」みんなも「ね、工藤君。」

「面黒？」

「よお、久しぶつじやねーがコナン。」

「おひひひん・・・・。」

みんなが”コナン”を待っていたらしい。

「じゃんね、新一。うひそ、コナン君。」

「蘭……？」

「私、コナン君がいなくなつて寂しかったの。」

「えつ……？」

「みんな、コナン君の」と忘れられなかつたの。」

「やうだぜ、コナン！」

「コナン君、バイバイも言わないで新一さんになつちやうひんだもん！」

「そうですよー。」

みんなが言つてゐる』ことがなんとなく分かつた。

つまり、コナンに会いたくなつて

クッキーに薬を入れたんだ。

「新一さんー。」

「結奈ちゃん……？」

「結奈、聴いてもらいたいんです。」

「？」

「ピアノ借ります。」

結奈は楽譜を開いた。

そして、音を鳴らす。

（～～～～）

力強い音・・・・。

けど、寂しい音もある。

これは、結奈ちゃんの思いが込められていてるんだなって思った。

結奈ちゃんの真剣な顔。

蘭や和葉ちゃんや歩美は泣いていた。

この曲は切ない歌だ。

俺はつい聞き入ってしまった。

（～～～）

パチパチパチパチ

みんなは盛大な拍手を送った。

結奈ちやんは笑っていた。

俺は結奈ちやんを見上げた。

「よかつたよ。」

「新一さん、」めぐなさい。

「・・・。」

「えつ~。」

「せつもの曲聴いたからチャウな。」

「新一さん・・・。」

結奈ちやんは裕也の元へ行つた。

「コナン君、久しふりやなあ。」

俺は、今日だけコナンでこよひと通つた。

「久しふり、和葉ねえちゃん。」

少々照れくさかった。

「わー藤むらつくなつたなあー。」

「・・・服部。」

照れくさくもなんともなかつた。

ガチャ

「・・・ど、どうかな？」

蘭は純白のドレスを着ていた。

「蘭ちゃん、素敵～！」

「似合ひじゃないか。」

「蘭ちゃん、似合いでー！」

俺は恥ずかしくって蘭を直視出来なかつた。

蘭はこつこに向かつて歩いてきた。

蘭は綺麗で

まるで・・・花嫁のよつだつた。

#32 「小っちゃなつた名探偵」（後書き）

はい、ここにちは奈津美です

なんとかここまで来ました。

メッセージでコナンが出てきて欲しいと言われたため
出しました。

いきなりコナンが出てきちゃ変なので
話のありすじをえて、ここまで来ました。

みなさんの評価がとても嬉しかったです。
そして、これからも評価をよろしくお願ひします。

#33 「少年探偵団」（前書き）

題名が微妙ですね。
読んでください。w w

#33 「少年探偵団」

蘭が近づいてきた。

なんだろ？・・・。

フワッ

(えつ・・・?)

蘭は俺を抱き上げた。

「おかえり・・・」「ナン君。」

「ただいま・・・蘭ねえちゃん。」

「ハナソベニ、勝手に面なへなつけやつんだもん。」

「ハ」めんなやー。」

蘭は笑つて言つた。

「ハ」のドレース、志保さんがくれたのよ。似合つ?

富野が・・・?

「ハ」似合つよ。」

「あつがとハ。」

蘭は俺をギュッと抱きしめて

「みんなとサッカーしてきたり?」

つて言つた。

俺は、今だまだまな服を着てるから無理だと呟つたら。

「これ、家からもつてきたの。」

蘭はTシャツとジーンズを俺に渡してくれた。

「行つてきます、蘭ねえちゃん。」

俺は少年探偵団と一緒に公園に行つた。

「いやあ・・・久しぶりだなあ。」

「わうだね、お父さん。」

「蘭ちゃん、そのドレス似合つわよ。」

「ありがと、新一のお母さん。」

「それにして、小五郎ちゃん。」

「なんだよ、有希ちゃん。」

「まだ、英理ちゃんと戻してないの?」

新一のお母さんは笑顔で言った。

「なつ・・・・・。」

「あんなに仲よかつたのにねー。」

「本当ですよねー。」

「おー、蘭まで・・・。」

「毛利さん、素直になつたらどうですか?」

「工藤さん・・・。」

「アリヤで、おひやさん。」

「お前まで言いつなー。」

（公園）

「コナン、行け!」

元太がコナンにバスをした。

「行くぞ、光彦!」

バンッ

「ああーーー。」

光彦はボールを止められなかつた。

「いえーい！俺達の大勝利だぜーーー！」

「あーあ・・・負けちゃつたあ。」

久しぶりだな・・・。

こいつらとこうしてサッカーをするのも。

「コナン君、ちょっとといい？」

「あ、ああ。」

歩美は俺を呼んだ。

人目のつかないとこうに行きたいっていうから

林の中に入つた。

ミーンミーン

セミの鳴き声が鳴り響く

「あのね、私コナン君が好きなの。」

「歩美・・・・。」

俺も歩美の気持ちは気づいていた。

とはいい、断るのはかわいそつだと思ったのだ。

「私達、10歳しか離れてないんだよー。」

(おこおこ・・・。)

「愛に年齢なんて関係ないもん!」

「歩美・・・。」

「コナン君のこと・・好きです。」

「「！」・・・」めん。」

俺は頭を下げた。

「・・・なーんてね。」

「へつ?」

「大丈夫、コナン君のこと諦めたから。」

「歩美・・・。」

「コナン君には蘭さんがいるもの。」

「「」めんな。」

「謝らないで、お母さんから聞いたの。」

「くつ～。」

「”初恋は実らない”と”恋は甘くて切ないもの”って！」

(おじおこ・・・小学生に教えるものか?)

「なんか、すつきつしちゃつた・・・。」

歩美は懇意に泣き出した。

「ふえ～～～ん...」

「ねつ・・・ねい。」

「ああ～～～ん!...」

「歩美・・・。」

歩美は俺に抱きついて

「どうして、ナン君と新一さんが同じ人なのー。」

「歩美・・・。」

「う・・・ひくひくひくひく。」

歩美はすっと泣き出づけた。

俺こまへりある」ともできず

歩美をギュッと抱きしめてあげた。

せめて、これくらいしてあげようと思った。

「ありがとぉ・・・。」

歩美はそう言い、元太たちのところへ戻った。

「女つて・・・強いな。」

俺もみんなのところに戻つてサッカーをした。

歩美は元気を取り戻していた。

＼・＼・＼・＼・＼・

「はあー疲れた・・・。」

「じゃあ、僕・・帰りますね。」

「私も・・・。」

「じゃあな・・・。」

「行くなよ・・コナン。」

「そうですよー。」

「行かないで・・・。」

「バーロー。新一の姿でもサッカーへいらっしゃるよ。」

三人は笑つた。

「バイバイ！」

「ああ、じゃーな！」

俺は家に帰つた。

夕日が出ていた。

「ただいまー。」

「ありあ～新ちゃんたあーだいまあ～。」

「母さん！？」

母さんはもうすっかり酔いつぶれていた。

「おお～」ナシ～ぐえーんをくあ～？」

「おつかやん・・・。」

おつかやんと母さんが酔いつぶれていた。

「！」お～「」うーちゅあーんーもおーつと飲むわよおおおー。」

「！」お～「」うーのーみむあーすー。」

やばこ・・・完全に酔つてゐる。

「お父さんーー。」

蘭も大変だなあ・・・。

「そや、おつかせ。今日、大阪に来てやー。」

「ええ?」

「オカソがせひ来てやつて言つてたで。」

「なにー! 静華さんがー!」

おつ、酔いが覚めた!

「よしー蘭、『ナン』、用意しそー。」

「ちゅうど、お父さんー。」

急だなあ・・・。

まあ、へつたりおいしいからいいか。

ん?ーの薬つてどれくらこもつんだ?

いやおう新ーの服も持つていつたほつがいいな。

俺は用意を済ませた。

父セセと母セさんは明日帰るらしい。

今日一日はいの家で過ごすといつてていた。

服部と和葉ちゃんは蘭に頼まれ来たらしい。

園子はわいつめ、迎えが来た。

西野と博士もやるやる帰るといつて帰った。

そして、工藤家には

父さんと母さんを残して

俺は大阪に向かつた。

新幹線の窓に映る自分の姿を見たら

思わず笑つてしまつた。

俺、今は外見一年生なんだあ・・・つて。

服部は、和葉ちゃんにまだ出でしていないらしい。

バカだよなあ・・・。

今まで、いろいろあつたなあ・・・なんて考えてみた。

「ハナン君、そろそろ着くよ。」

「ふにせー？」

気がついたら俺は寝てた。

前を見たら

服部が和葉ちゃんに肩を貸していた。

服部の顔が赤かったので

俺は笑つてやつた。

「和葉、起きるわ。もう着いたで。」

「ん・・・平次。」

「まひ、むづ止まるで。」

新幹線は止まつた。

俺達は新幹線を降りて

服部の家へ向かつた。

奈津美です。

あと一話で完結です。

今日完結か明日完結かは、みなさんが決めてください。
評価と一緒にお願いします。

純由のドレスが前話に出てきました。

これは、続編に活躍するかと…

えっと、他の作品をみなさん読んでくれたらしいです。

「雨上がりの空2」が何気に好評でした。

「雨上がりの空3」も書こうかな（笑）

みなさん、あと少しお付き合いで下さい。

続編も書き進めています。

もしよかつたら、続編も読んで下さい…

#34 「やめられない、ナナ八郎」（漫畫セ

題名からして話はだいたい分かると思います。

#34 「やがて、やがて」、「おこしーーー。」

「おこしーーー。」

「うそ、嘘うそです。」「

「やがて、やがてのやがてが最も面白い。」

「あたつまえやなーか。」

「やつと食べ下す。」

俺達は今、服部の家で、”ひちつ”を駆走になつてゐる。

「毛利さん、ほんまに来て下されると思つませんでした。」

「いえいえ、静華さんの頼みといえば断るわけあつません。」
やべこひだ。

わつわつと母の顔になつたつてこのやう。

通天閣や大阪城

東京では味わえない風情だ。

「わあー綺麗な満月ー。」

「そーぢや。」

和葉ちゃんは得意げに言った。

「いや、最近できた”ヒマワリの園”つちゅーのがいいらしいで。」

「ああ、いの近く一番のデースポットや。」

「じゃあ、後で行こうよ。」

「僕も行く。」

「おまえの園でござりました。」

卷之三

「ほな、
行こか。」

たとがお・ち・んが羽力

時間はもう11時00分

こんな夜遅くだから

デー・トス・ポットとはいへ、人はいなかつた。

「君の先を行くヒトへの道つちゅーのがんねや。」

「何うなの?」

「そや、途中で一手に分かれてるんや。」

俺達は周りのヒマワリを見た。

「綺麗・・・。」

月夜にあたるヒマワリも綺麗なもんだ。

「あれがYの道?」

前の方にある、分かれ道。

あれがYの道だろう。

「ほな、俺と和葉は右を行くから。」

「私とコナン君は左ね。」

私達は、このYの道手前で12・00で待ち合わせることにしてた。

「ねえ、コナン君。」

「なーに?」

「・・・怒つてないよね?」

「へつ?」

「だつて・・小さくなつたから。」

「バーロー。俺は嬉しいぜ。久々に蘭を見上げてるんだから。」

「ちゅうと、新一。今はコナン君なんだからね。」

「あつ、わうだつた。」

蘭とつなぐ手が

いつもより熱かつた。

ハアハアと息が切れてきた。

「ねえ、蘭ねえーちゃん。」

「なに? コナン君。」

「新一にこちやんのビビが好き?..」

「...」

今はコナンだから

いつこいつ質問もありだよな。

「えっと...!...」

「どうしたの?」

「見て...!..」

田の前にあるのは木でできたベンチとヒマワリ畑だ。

「あそこへ来て坐つよ。」

俺と蘭はあそびに座つた。

「綺麗な夜景……。」

「で、さつきの質問はあ?

「えつ・つと・・・。」

ハアハア

また息が切れてきた。

ドクン・・・・。

ヽ・ヽ・ヽ・ヽ・ヽ・

「見て平次ーベンチヒマツに座るー。」

「「」が、ホールつけやー訳やな。」

「どうあれ、座りか。」

「ああ。」

俺は和葉の隣に座る。

前はどうキドキせーへんかったのに

今じゃドキドキというか・・・。

トクン・・・つて感じや。

なんか心地ええのや。

「なあ、平次。」

「な、なんや?」

「約束・・・教えてーな。」

「・・・・・分かつた。」

もう、しきばつくれるのはよそいつと思った。

舌が回らない。

「あ・・あ・・・・。」

「なんや?」

「お・・・俺の初恋の人は・・・。」

「人は?」

「その前に、その人が歌つてた歌を教えるさかい。」

「分かつた。」

「おひたけえびすにおしおいけえ

L

(えつ・・・?)

「よめやんろひかくた！」としゃべる

平次
・
・
・
その歌。

「ああ……やうやう。」

平次

「ほんとうに、今更ながらお詫びを…」

「分かってる。」

和葉は平次の肩に頭を乗せて歌つた。

まるたけえひすにおしおいがえ
よめをさんかくたに立しも

L

平次は笑つてその歌を聴いていた。

{ . { . { . { . { . {

デクンデクンデクンデクン

「ぐう」

「『ナン君』」

「へへへ……。」

「わ・・・明日のフ・・のあたりまで平氣なはずなのに。

『ただ、上藤君は一回幼児化してゐるから24時間びつたりって訳にはいかないかも。』

そうだ・・・志保さんが言つてた。

ビヘッヘ・・・。

「ねえ、『ナン君』よく聞いてね。」

「あ、ああ。」

俺は、朦朧とした意識の中聞いた。

「私はね、新一の全部が好きよ。」

「う・・んねえーちゃん。」

「新一の推理オタクなどいりも、やれこじりも鈍こといりも。」

「ば・・バーロー。」

ドクンドクン

「ぐつー。」

「・・・いつてらっしゃい、コナン君。」

「・・・らんねー・・・ちや・・・ん。」

一 わよなら・・・ヒナン君

一 もななら……らんねえ——ちせん

私は二ナン君にギスをした

月光は私達を照らした

二ノノ君は彦を真
元はしながら

目次

二十一
力行

卷之三

月刊日本

• { • { • { • { • {

「ねえーちゃん、大丈夫かあ？」

「蘭ちゃん！？」

二人は、私が約束の12：00になつても来なかつたから心配して来てくれたのだろう。

「大丈夫、けどコナン君が新一に戻っちゃつた。」

ベンチで寝てゐる新一。

「そつか。」

「私、コナン君にいいたいこと言えた。」

さよなら・・・。

辛いことだけぞ。

今日のさよならは嬉しかつた。

寝てる新一の顔も

明るかつた。

#34 「やめひなり、コナン劇」（後書き）

こんにちは、奈津美です。

このあと、最終話も更新してしまいます。

長いよつで短い時間でしたね。

コナンは新一に戻りましたね。

最終話はあまり期待しないほうがいいかも^ ^ ;

自分で納得できませんでした。

けど、この終り方でいいと思つたんです。

最終話の後、お知らせを更新しますので
読んで下さいね。

#35 「ライバルは中学生!-?」（前書き）

一応話は完結ですが、お知らせがあるので。
次のお知らせで一応完結です。ww

#35 「ライバルは中学生ー?」

あの後

俺は日が覚めて、服部の家に帰った。

俺と蘭は同じ部屋だつた。服部と和葉ちゃんも同じ部屋だ。

蘭と顔を合わせるのが照れくさかつたけど

「新一、おかえり。」

蘭がそつと戻つてくれたら

照れくさむとか無くなつた。

1・00へりいだつただろうか。

俺達は寝た。

正式に言つと、もつと遅かったかもしねない。

意識しちゃつて眠れなかつた。

蘭の寝息を聞くと余計眠れない。

蘭の寝顔を見てたら

蘭は誰にも渡したくない。

そう思った。

～三日後～

俺達は東京に帰った。

おつかやんは

「コナンと旅行ならまだしも、なんでこいつと・・・。」

とかぶつぶつ言っていた。

宮野は

「ありがとう、貴重なデータが得られたわ。」

冷ややかな顔でそう言った。

父さんと母さんは箱を残して外国に戻った。

箱にはこう書かれていた。

『服部君たちにあげてね。一人の仲が進展するかもよ。』

俺は今度会うときにも服部に渡そうと決めた。

服部は人のことばっか言って、自分達は進展しねーし。

鈍い男だぜ。

＼・＼・＼・＼・＼・

俺は家でのんびりしてた。

蘭はレモンパイを作ってくれている。

ピンポーン

「はいはい。」

ガチャ

「」ひむひむ。

「結奈ちやん！」

「蘭ちゃんこまわ？」

「ああ・・・。」

まさか・・・また決闘？

「結奈ちやん、何？」

「結奈、蘭さんのライバルですー！」

「くつ～。」

俺は蘭と同じ反応をした。

「結奈は、あなたに負けません。」

「へ？ ？」

「空手も負けません、恋愛だって、もつとこころ遊ぶわー。」

「裕也」とへ。

「もうすこいつまい、蘭さんのライバルは中学生なのですー。」

（なのです・・・・・）

「は・・・あ・・・・。」

「なので、負けませんよ。あなたよつ若こしね。」

「で、用件はそれだけ？」

「はーーー。」

チンツ

「なんの音ですかあ？」

「レモンパイが焼けたのよ、結奈ひやんも食べれる？」

「あー、もって帰ります。」

「ソーリーで食べてこつたら？」

結奈ちゃんは笑顔で首を振った。

「裕也と食べたいから・・・。」

結奈ちゃんはそう言った。

「はい、レモンパイ。」

「ありがとうございますー。蘭さん！ 今日から・・・いえ、昔からライバル！」

そう、蘭と結奈ちゃんは出会った頃からライバルだったのかもな。

で、俺もある意味ライバルだったかもな・・・。

「では、さよなら。」

結奈ちゃんは帰った。

「ライバルだつて。」

「なつ。」

『アハハハハ。』

一人で笑った日々を

俺は忘れない。

ライバル。

誰にだつてこの存在はこのと思ひ。

ライバルとは

戦いあう存在でもあり

助け合ひともできる存在だと思ひ。

蘭は

「結奈ちゃん、私なんかとライバルでいいのかな?」

つて笑つてた。

「なんかじやねーよ。」

お前は・・・。

ライバルをけぢらせる

最高の彼女だよ。

「ん?なんか言つた?」

「いや、このパイおこじになつて。」

「そつか。」

「なあ、蘭。」

「なに？新一。」

「俺もお前の全部が好きだぜ。」

「新一・・・・ありがとう。」

今日の空は

今まで見た空よりも

一番明るく綺麗で

素敵だった・・・。

#35 「ライバルは中学生!-?」（後書き）

長かったようで、短かった時間。
さつきも書きました。

時間はお金じゃ買えない。
それくらい大切なものです。

大切な時間をこの小説に使ってよかったです。
この小説を忘れません。

評価をお願いします。

次回作にも役立てたいので^ ^

みなさんの評価をお待ちしています。

2006 9 18 (火) 21:52

+ 1 「お知らせ」（前書き）

微妙にギャグが入っていますww

+ 1 「お知りせ」

「とにかく、新一です。」

「このハイバルは中学生!...はいかがでしたか?」

今回の作品を通して、きっと作者も小説の奥深さを知ったでしょう。

まあ、父さんなら分かるかもな。

なんとか蘭に告白できました。

みなさんの応援のおかげです。

えっと、次回作は...みんな、もう知ってるよな。

「プリティ園子の恋模様!」

「園子...お前じつから出てきたんだよ。」

「ワシの恋物語かの。」

「博士...・・・違つんだけどなあ。」

「志保の研究ノートかしら?」

「...・・・富野。」

だーつ!...

「話が続かねえじゃねーかー！」

「ライバルは婚約者ーー？」（らいばるはフイアンセーー？）

「ええーー！私が主人公じゃないのーー！」

「服部と和葉ちゃんだよー！」

「ワシじゃないのかあーー！」

「博士にはせつねんがいるだろーー！」

「私の話はいけないのかしりっ！」

「いや・・・その・・・。」

「作者が書きこいくいだらう・・・・・。」

「お前の話は・・・・。」

「つい」と、新連載は今月中に始まるやーー！」

「俺らの話、見てやつてや。」

「服部ーー？」

「よのしくなあ。」

「和葉ちあさんーー？」

なんだか「じりや」「じりや」になっちゃつた・・・。

「じゃあ、最後にあの決め台詞言いましょうよー。」

(なんで園子がしきつてんだよ・・・。)

— 真実はいつも一つ！

作者です。

これで終わりってのもなんですがへへ

新連載についての希望、ご意見を頂きたかつたのでへへ

ライバルは中学生！？の評価とともにお書き下さい。

• } • } • } • } • } • } • } • }

空が笑つてくれてるみたいだな。

服部、次はお前の番だぜ · · · · ·

頑張れよ・・・服部。

お前は鈍感だから

恋に不器用だから

時間はかかるだろう。

けど、いつか気持ちが分かる。

俺らもそうだったから・・・。

な・・・蘭。

「新一？」

「わっーーー！」

「どうしたの？ボーッとして。」

「いや・・・なんでもない。」

好き・・・・・。

この一言が大切だぜ。

和葉ちゃんも頑張れよ。

ふうー・・・。

もうつらつらひとも無くなつたな。

これでこの話は終わりだけど。

新連載で、また会おうな。

じゃあな。

真実はいつも一つ！

～今度こそ完～

+ 1 「お知り叶」（後書き）

「これで本当におしまいです。」

評価がほしいです。

もう書き残すこともないのです。

みなさん、「愛號ありがとう」「やーいました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8632a/>

ライバルは中学生！？

2010年10月21日20時53分発行